特246
592

石山脩平講述

西洋教育史講義案

羅馬教育史

東京 賢文館 發兌

0042279000

0042279-000

特246－592

西洋教育史講義案

石山脩平・著

賢文館

昭和11

AHC

特246
592

帝國圖書館藏

石山脩平著

西洋教育史

〈羅馬教育史〉

東京 賢文館藏版

帝國圖書館藏

第二篇　羅馬教育史

〈目　次〉

序說　羅馬教育史の地位とその時代區分……一

一　羅馬の文化史的地位……一

二　羅馬教育史の時代區分と主要問題……三

第一章　共和時代の教育……五

第一節　共和時代の國風と教育事實……五

共和時代の國風と教育の理想及び內容……家庭教育……學校教育……社會教育

第二節　共和時代末期の教育思想……一七

一　教育思想の發生とその全體的特色……一七

教育思想の發生……教育思想の代表者とその全體的特色

二　カトー……一八

その生涯……羅馬の國粹保存と希臘的國風の排斥……教育の實踐及び思想

三　キケロ……二六

その生涯……思想の全體的特色……一般教育思想……雄辯家教育論

四　ワルロ……二七

その生涯……教育思想

第二章　帝政時代の教育　……三九

第一節　帝政時代の國風と教育事實　……三九

アウグスツスの治世と羅馬黃金時代……國風の頽廢と教育の大勢……家庭教育の頽廢……社會風教の頽廢……圖書館の發達……教育制度の發達……初等教育及び中等教育……高等教育

第二節　帝政時代の教育思想……五一

一　セネカ　……五一

その生涯……教育思想

二　クインチリアーヌス　……五四

その生涯……辯論教授論の價値とその構成……家庭教育……學校教育の長所……兒童の個性とその取扱方……文法教師の資格と辯論術の基礎教科……多くの教科の學習可能性……その史的地位

三　プルータルコス　……六四

その生涯……根本思想……身體の訓練……性情の訓練……實踐理情の訓練……實踐理性より理論理性への轉移……理論理性の訓練……その史的地位

結　語……羅馬教育の全體的特質　……七五

第二篇　羅馬教育史

序說　羅馬教育史の地位とその時代區分

一　羅馬の文化史的地位

吾々は希臘教育史の始に於て、希臘文化がその後のあらゆる文化の源流であり且つ原型であること、並びに希臘教育史が凡そ教育の事實及び理論に對する典型的始源を提供してゐることを述べた。そして希臘教育史の終に於ては、希臘が羅馬によつて亡ぼされ、それにも拘らず「捕へられたる希臘が猛き勝利者を捕へ、學藝を荒れたるラチウムに持込んだ」ことを指摘した。羅馬の文化史的功績の最大なるものは實に希臘文化の繼承とその傳播にあつたのである。

羅馬はその建國の創業の進展と共に、北はエトルーリア(Etruria)を介して、南は所謂大希臘(マグナグライキア)(Magna Graecia)より、希臘文化を吸收しつゝ成長した。勿論これは原始的希臘文化の吸收であつて、そこには羅馬自らの發展がより前景に立つてゐたけれども、後年希臘を自國の屬領とするに及んで、黃金期並びに爛熟期の希臘文化は滔々と羅馬に移入せられ、こゝでは寧ろ羅馬の希臘化が時代を特色づけるに至つた。かくして羅馬人は文化的には創造者であるよりも普及家であり、發案者であるよりも實踐家であつた。彼等の特に卓越せる能力を證明する武力

及び法制さへも、その始源は希臘より學び受けたものであり、その整備充實も、それによつて世界を蓋へる大版圖を開拓・統制し、希臘文化繁榮の地盤を用意するに役立つた觀があるのである。

人々は近世文化の黎明を文藝復興運動に見出し、この運動の本質を古代文化の再生に求める。併し謂ふ所の古代文化とは、運動の當初に於て專ら羅馬の文化であつて、希臘文化は羅馬文化の復興を介して初めて呼び出された。即ち文藝復興運動を先導せる伊太利の人文主義者達は、先づ祖國の前身たる羅馬の榮光を偲んで讃嘆これを久しうし、やがて羅馬文化の更に深く遠き源流に遡つてつひに希臘文化を吸收するに至つたのである。

中世文化の基調を成せる基督教も、中世世界を支配する前に先づ羅馬を獲得した。即ち羅馬が當初の頑迷を棄てゝ基督教に歸依し、ヘブライ語及び希臘語の聖書を羅甸語に飜譯し、又羅馬帝國内の神學者が教義の基礎づけを行ふことによつて、基督教の世界的生命は不拔に培はれた。新興ゲルマン民族はそれ故に先づ羅甸語を介して基督教化せられたのである。かくして羅馬は、その政治的勢力の強大さと、それにも增して廣く長かりし羅甸語の生命との故に、古代希臘文化のみならず中世基督教文化をも、近世歐洲民族の共通の財寶として保有し傳播したのである。

史家は羅馬を大なる湖に譬へ、百川これに注ぎ、百川これより流れ出たことを述べる。これに注げる百川の中、特に顯著なる主流は、上述の如く、さきには希臘文化であり、次では基督教文化である。而もこの兩文化は世界文化全體の基本潮流に數へられるものであつて、一たび羅馬に注ぎ込むことによつて世界的地盤に浸潤し、やがて羅馬の崩壞の後も、新しき生命に蘇りつゝ、近世世界文化の主流を形成して來た。若し羅馬人の壯業雄圖がな

かつたとしたら、輝ける希臘民族（へれんしきす）の學藝も、基督の聖なる教も、單に地方的・局所的文化たるに止まつたかも知れない。吾々はそれ故に重ねて羅馬人の文化史的功績をば、傳播者・普及者のそれとして讃美するのである。

二　羅馬教育史の時代區分と主要問題

羅馬の政治史並びに文化史に於ける時代區分に從つて、羅馬教育史の時代區分とその各時代に於ける主要觀點とを、吾々は次の如くに豫定したいと思ふ。

第一期は羅馬の建國（753 B. C.）よりアウグスツスの帝政時代（Augustus, 31 B. C.—14 A. D.）の出現する迄でその大部分が共和政治時代であるから、吾々はこの期間の教育事實及び教育思想をば、共和時代の教育として叙述することゝする。この時期の初め、羅甸民族はチベリス（Tiberis）河口の羅馬（Roma）を中心として國を建て、やがて貴族を主とする共和政治となり、外は次第に四隣を攻略して版圖を擴め、内は貴族・庶民の抗爭を緩和して法制を整へ、かくて武力と法制とを特色とする鞏固なる國家を建設した。かゝる建國・創業の雄圖は羅馬人本來の質朴・剛健にして意志的・實踐的なる性格を益々練磨して、玆に古き羅馬の國風を形成し、その雰圍氣の裡に實直・健全なる教育は行はれた。この間にも既述の如く、希臘文化は間接に學び取られたけれども、全體の時代精神は寧ろ羅馬固有の面目の發揮として特色づけられてゐた。然るに前二世紀の中葉、希臘をその屬領としてより、希臘文化と希臘的教育との直接輸入が漸く行はれ初め、後の帝政時代の文化と教育との前階を形成した。但しこの時期の希臘の感化は、より强大なる國粹思想の反擊・警戒によつて、未だ充分には羅馬人の生

活及び思想に浸潤するに至らなかつたのである。かくして共和時代の教育史に於ては、建國・創業の雄圖を通じて培はれたる原始羅馬的國風が、その家庭教育・學校教育及び社會教育の上に如何に素朴・質實なる反映を示したか、並びにそれ等が、やがて萠し初めたる希臘的影響の下に如何なる變動を受けたか、又その事實が憂國の人士の如何なる教育的反省—教育思想—を生ぜしめたかといふ諸點が中心問題である。

第二期はアウグスツス帝の頃より羅馬の衰亡に至る間で、吾々はこの間の教育事實及び教育思想をば、帝政時代の教育として叙述する。アウグスツスの治世はアテナイのペリクレス時代に比すべき羅馬黄金期であり、世界を蓋へる大版圖は一家の如くに統一せられ、首都羅馬は壯大・美麗の限りを盡してプルタルコスの所謂「世界を平和の港に繫ぐ錨」となつた。而もまた沒落の素因はこの極盛の蔭に醸されつゝあつたのである。即ち既にして敵國・外患なき强大なる國内には、享樂・奢侈・殘忍の風潮が滔々として流れ充ち、所謂羅馬の榮華とその凋落とが時代の大勢を特色づけたのである。この帝政時代の教育史に於ては、かゝる國風に影響せられて先づ往年の堅實なる家庭教育が如何に衰頽し、又社會が如何に教育的職能を失墜して大衆を墮落に逐ひやつたか、それにも拘らず學校教育のみは、何故に且つ如何なる方向に發達し繁榮したか、といふ諸問題が主要觀點である。こゝでは吾々は、一面に於て羅馬とその全屬領とが如何に狂熱的に希臘化されて行つたかを見ると共に、他面それが如何に大羅馬の現世的生命の滅亡を原因づけたかを究めねばならぬ。

第一章　共和時代の教育

第一節　共和時代の國風と教育事實

共和時代の國風と教育の理想及び内容　共和時代を貫く羅馬國民の教育理想は、一言にして、强き意志の人、實踐の人を養成するにあつた。古典時代の希臘國民—特にイオニア種族によつて代表せられた希臘的面目—の特徴は既に早くから、眞理のために眞理を觀、美のために美を觀る所の觀照（テオーリア）の生活を示し、理論的透徹と藝術的洗錬とを人生の上に表現することに彼等の德—彼等の教育理想—は存した。そこでは單に强壯なる身體が求められる代りに、均齊と調和とに美化された身體が讃へられ、精神的にもあらゆる價値方向を多方的に圓滿に實現せる「美しき善き性質」が追ひ求められ、而もかゝる善美の精神と身體との不可分に結合せる狀態が人生の望ましき姿として仰ぎ慕はれた。然るに本來の羅馬人的理想は、希臘に於ては寧ろ特例と見らるべきスパルタ的精神に近似しながら、それを單に軍國征戰の要求にのみ局限せずに、和戰何れの地盤にも擴大し、戰に於て飽迄も强く、平和に於て統制・秩序を尊重し、權利・義務を恪遵し、その身と家と祖國とを堅き操守と舊き傳統とに安固ならしめることに求められた。かゝる心情・行爲こそ羅馬に於ける「人らしき資格」としての德（virtus）であり、この德を具へたる「善き人」（vir bonus）が、希臘に於ける「美しき善き人」に對して、羅馬人の本來の生活理想であり、同時に共和時代を貫く教育理想であつた。要するに希臘人が「觀照」の「閑暇」を有したのに對して、羅馬

人は「實踐」の「多忙」に終始し、希臘人が青春的な理想主義（Idealism）に生きたのに對して羅馬人は大人びた現實主義（Realism）に生きたのである。

かゝる教育理想は當然教育の內容の上に注目すべき特色を現はした。第一にそこでは、希臘の自由民が殆んど關與しなかつた經濟生活が、羅馬國民の重要なる生活內容、從つて教育內容であつた。農牧の民を奴隸としてその上に君臨した希臘自由民とは異つて、羅馬人は貴族と雖も本來チベリス河畔の農牧業を自ら開拓せる人々であり、自然（Natura）のまゝの荒地を耕作（Colere）すること、そして開墾され調整された土地（Colonia）を建てることは、實に羅馬人に於ける文化（Cultura）の原義であり、謂はゞ農耕（Agricultura）の精神が羅馬文化の精髓であつた。更にエトルーリアや大希臘等との間に通商も早く開け、羅馬人の文化は一面これを動因として促進せられた。かくして經濟生活は羅馬國民の注目すべき特色であつて、かの十二銅板法に財產上の權利・義務、その防衛や相續等に就て詳細に規定してあるのを見ても、これが如何に重要なる生活內容であり、從つて教育內容でもあつたかが窺はれるのである。

第二に羅馬はスパルタや初期のアテナイと同樣に、四隣に敵を負うて發達した國であるから、軍事が國民生活の主要內容であつたことは言ふ迄もない。エトルーリアのウェイー攻圍戰に於て軍隊に俸給を與へてより職業的軍人が漸次に增加したとはいへ、羅馬本來の面目は國民皆兵であり、從つて軍事は國民教育の主要內容であつた。

第三に羅馬教育の主要內容は政治的生活であつた。これも希臘のそれと軌を一にせるものである。「議場」

（Comitium）と「市場」（Forum）と「演壇」（Rostra）とは、實に羅馬の成人が青少年子弟を率ゐて絕えず出席する場所であり、彼等の若き耳目は、そこに國事が議せられ、裁判が開かれ、憂國の熱辯が揮はれるのを見聞した。そしてそれ等の事の規範・準則が十二銅板に刻せられてあるのを、彼等は暗誦したのである。法律的思想、政治的訓練は、實に羅馬の國民教育を他の如何なる國の教育にも優つて特色づけた內容である。

土地を開墾し、自然を價値化する所の文化は、やがてかゝる仕事を原初に於て開始した祖先、若くはかゝる仕事を守り掌る神に對する禮拜（cultus）となる。單に農耕に限らず、商業に軍事に家政に政治に、苟も人の價値的行動に關する限り、夫々に守神があり、夫々に宗教的儀禮法式があつて、これを禮拜し遵奉することは、原始的民族の通有性であるが、羅馬に於ても亦かゝる宗教的要素が日常生活に深く結合してゐた。そして家の父は同時に家の祭司であり、母や子女は、父に從ひ父を助けて、共に祭事を營むことによつて、傳統的宗教に導入せられ、訓練せられたのである。かくして宗教的信仰と儀禮とは、堅實なる羅馬文化の根柢であり、同時に羅馬教育の主要內容であつて、十二銅板法もこの方面に關する條令を多分に含んでゐる。

以上の如き經濟生活・軍事生活・政治生活・宗教生活は何れも少青年が先輩壯年者の實踐に參加し若くはこれを親しく見聞することによつて與へられた教育內容であるが、これ等の內容を文獻に收めたものとして重要なる教科材料となつたものに十二銅板法と英雄偉人の傳記とを數へることが出來る。十二銅板法が如何なる內容と意義を有するかは、既に隨所に述べ來つた所で推知せられるであらう。英雄偉人の傳記が教育內容として重要なる役割を演じてゐたことは羅馬に於ける注目すべき事實である。プルタルコスの『英雄傳』は希臘羅馬の各方面の

偉人を比較論述した列傳であつて、帝政時代の著作であるが、併しこの書に纏められるまでの材料としては、既に早くから偉傑の傳記が何等かの形態に於て、傳へられてゐたことが推定せられる。そして羅馬の青少年達は、恰も希臘に於けるホメロス詩篇の如く、それ等の傳記に親しみ、而もホメロスの神々に對するよりも更に親近なる關係に於て、地上に大なる足跡を遺せる人々を追慕し、これを學び倣つたものと思はれる。以上の如き理想及び內容を有する羅馬の教育は、次にそれが、如何なる場所に於て、如何なる人々により、如何にして實施せられたかを見る場合に、一層具體的に吾々の前に展開せられるであらう。

家庭教育　建國以來共和時代を通じて、羅馬教育の最も主要なる場所は、あらゆる健全なる教育が然る如く家庭であり、そして家庭教育の中心は母であつた。子女に健全なる道德的並びに宗教的基本情操を培ひ、正しき人生觀・生活態度の根柢を築いたのは母であつて、キケロの所謂「母の膝下に教育せられること」(educari in gremio matris) は、實に羅馬教育の常道であつたのである。この事の結果として、婦人に對する尊敬は、基督教以前にあつては、羅馬人に於て他の如何なる國民に於けるよりも高く現れた。特に既婚の婦人を意味するマートローナ (matrona) といふ語は、同時に尊敬・高貴・有德といふ副次的意味を伴つてゐた。街上に於ても男子は敬意を以て夫人(マートローナ)に道を讓り、又夫人に對し、若くは夫人の面前に於て、無作法の話をする者は罰を受けるのであつた。要するに母は一家の中心として家族一同から仰がれ、その子女や下婢達をば、身を以て範を示しつゝ、教導したのである。

夫人は又その夫が會食や會議や裁判等の公共の席に出る場合はこれに隨從して、知見を廣め、その名聲・德望

に於て時に男子に匹敵することもあつた。故に夫婦間の相互の尊敬と信賴とは頗る强く、建國以來五百年もの間(前二三一年まで)離婚の沙汰を聞くことがなかつた程である。

かくの如く健全・純潔なる雰圍氣の裡に子弟は心身を薰陶せられ、長じて後は兩親の仕事や娛樂に參加しつゝ、到る處に謹嚴・實直なる羅馬的精神を呼吸してゐたのである。健康にして力强き身體、神への敬虔と法律の尊敬、言動の謙虛と堪能、服從・堅忍・節制・勤勉、理解力、自己の力と國家の統制とに對する信賴、凡そかくの如き諸德が幼少の間に養はれた性情であつて、かゝる子供こそ長じて物分りのよき人、善良なる父、有爲なる市民となつたのである。

次に父は子供に對して絕對の權利を有してゐた。十二銅板法の第四表たる「父權」(patria potestas) の規定によれば、父は不具・畸形の初生兒を直ちに殺す權利を有し、又子供の生涯を通じて、監禁し鞭韃し、鎖に繫いで農耕の勞役に服せしめ、殺害し又は賣却し得る權利を有し、公職高位に就ける後の子供に對してすらこれ等の權利を有してゐた。かゝる絕對權を有する父は同時に子供の教育の主なる擔當者であつた。卽ち父が家に於て、若くは國や市區の祭壇に於て、神や祖先を祭る場合には、子供等を補助者として伴ひ、又舊き英雄や政治家の讃歌を唱へる時には子供等にも聞かせ、父が他に招かれた時にも子供等を伴つた。又耕作・播種にも子供等を參加せしめ、乘馬・水泳・拳鬪・劍術等をも父が子供等に範を示して練習せしめ、且つ讀書・習字・計算及び法律等生活に必須なる知能をも子供等は父から學んだのである。そして又子供等は父から、元老院や民會や兵員會や戰場や陣營等に於ける有樣を語り聞かされることによつて、未來の有爲なる公民・戰士たる準備を、家庭に於て與へ

られつゝあつたのである。

母と父との外に家庭教育に參加せるものとしては、共和時代後半に、童僕と家庭教師とがあつた。即ち羅馬が大希臘地方を併せるに及んで、希臘の奴隷若くは希臘語及び希臘文化に通ぜる羅馬の奴隷が、童僕として、上流家庭に雇はれるに至つた。そして初期の童僕はその高き教養と純潔なる品性とを以て、家に於ても、外出先に於ても、よく兒童の言動を監督指導し、家族から尊敬と權威とを與へられてゐた。彼等に與へられた種々の呼稱、即ち監督者（custos）・仲間（comes）・教師（rector）・王（rex）・主人（dominus）等を見ても、童僕の高き地位と多樣の職責とを窺ふに足るのである。尙ほ上流家庭では、早くより特別の教師（magistri）を聘して、兒童に初步の教科を教授させ、希臘文化移入後は、希臘の文法教師を家に招聘することも行はれた。

學校教育　家庭教師を聘することは上流家庭のみがなし得る所であるから、一般民衆に初步的知能を普及させるためには、學校の必要があつた。羅馬の學校は何れも私立で、而も時代の進展と共に、漸次に程度の高きものを生じ、共和時代を通じて、結局初等・中等・高等の三種を有するに至つた。既に共和時代の初期、十二銅板法制定の頃から、市場の特定の小亭（taberna）に、主として年長の婦人のための初等學校が存したことを史家は傳へてゐる。故に少年のための學校は更に早くからあつたことが推定せられる。これ等の初等學校は「ルードゥス」（ludus, pl. ludi）と呼ばれた。それは本來「遊戯」・「競技」等の語義を有し、轉じては閑暇に任せて片手間にする仕事を意味するものであつて、即ちそこで學習する讀書・習字・算數等が、羅馬の初期に於ては、生活の主要な內容ではなく、從つて教育內容としても重要性を有せず、子供が閑暇を埋める遊び仕事の如くに考へられてゐ

たことを示してゐる。

かゝる初等學校は、市場や街の三叉路等にある小屋の中に設けられ、後世この程度の初步知識を「三叉路的知識」（trivialis scientia）と呼んだのは、學校が三叉路（trivium）にあつたことから起つたものである。前二五〇年頃の有名な元老院議員スプリウス・カルウィリウス（Spurius Carvilius）が學校を開き教授に熱中してから、この種の初等學校は益々普及して來た。

初等學校の教科內容は讀書と習字と算術とであつた。十二銅板法の暗誦も讀書と結合して行はれた樣である。（希臘國民教育の主要教科たる體育と音樂とが羅馬に於てつひに教育の本質的內容とならなかつたことは注目すべき特色である。）これ等を教授する人を讀書教師（literator）と呼んだ。讀書の教授法は、先づ文字の名稱と順序とを、次にその形と發音とを教へ、然る後に綴字を教へた。この綴字は教へ方が頗る拙劣で修得が遲く、教師は鞭を加へて漸くこれを學ばしめた。喜劇詩人プラウツス（Titus Maccius Plautus, 227—184 B. C.）の皮肉な誇張によれば、兒童は綴字を誤る度毎に、その身體の皮膚を下女の上衣の樣に染められねばならなかつた。讀書に次で間もなく習字も課せられ、教師は初め兒童の手を取つて書方を教へ、次に文字の手本を與へ、更に短文の手本を與へて、模し習はしめた。習字用具としては、蠟を布いた板と、鐵筆（stilus）とを用ひた。羅馬人に取つて特に重んぜられた教科は算術で、そのためには既に相當年長の少年も特別の「算術教師」（calculator）の許に通學した。羅馬の數字は記數法が不統一であり、且つ十進法でなかつたので、筆算の外に、十進法に基く指算と算盤とが用ひられた。指算は左手の指を以て一より九までと十より九十までとを表し、右手の指を以て百より九百ま

でと千より九千までとを表し、一萬以上は何れかの手を身體の特定の場所に觸れる身振によつて示された。この指算は東方諸國や希臘に於けると同樣に伊太利に於ても中世期まで一般に行はれ、商取引その他の日常計算に利用せられた。算盤（abacus）は、石・木材又は金屬の板で、これを種々に用ひて數を表した。又幾何圖形は板の上に砂を布いて鐵筆で描いた。公私共にその收支記入には計算板が用ひられた。

希臘文化の輸入と共に、初等教育の教科目としても希臘の詩人の作品が採用せられ、それを教へるために「グラマティクス」（grammaticus）若くは「リーテラーツス」（literatus）と呼ばれる「文法教師」が、先づ上流家庭の教師として、次で學校教師として現はれた。ホメロス詩篇は羅馬に於ても永く中心的教材であつた。かく希臘の教育內容が採用されたことは、羅馬の教育が眼前直接の實利主義より高き理想主義的立場にまで進んだことを意味する重要事實である。やがて希臘語の教材の外に、希臘作品の羅甸譯並びに羅甸作品も用ひられるに至つた。即ち大希臘から羅馬に來たリウィウス・アンドロニークス（Livius Andronicus, 284—204 B. C.）が『オデュセウス』篇を羅甸語に譯してより、それは普く羅馬の文法學校に用ひられ、又續いて各種の希臘作品の羅甸譯が行はれた。カラブリア（Calabria）のルディアイ（Rudiae）に生れ、サルディニア（Sardinia）から羅馬に來たエンニウス（Ennius, 239—169 B. C.）も亦希臘の詩を羅甸語に譯し教へた。更にペルガモンから羅馬に大使として來たクラテス（Crates）は前一五七年に初めて文法を羅馬に導入したと言はれてゐる。かくの如くにして、共和時代末期には、從來の初等學校の外に、より高き程度の「文法學校」が出來、そこでは希臘語及び羅甸語の文法並びに希臘・羅甸の作品が「文法教師」によつて、教授せられたのである。

文法學校の教師は、やがて同時に希臘の修辭法（雄辯術）即ち議會や法廷に於ける論難辯護の術をも教へた。スエートーニウス（Tranquillus Suetonius）によれば、文法學校教師は、その生徒が當時漸く勢力を得つゝあつた修辭學教師（rhetor）の許に走ることを防ぐために、修辭學を教へたのである。故に文法學校の生徒中にはそこから直ちに法廷に赴いたものもあつたとのことである。然るにその後專門の希臘修辭學教師が次第に增加し、而もそれが羅馬の國粹思想の反感を買へるものゝ如く、前一六一年に元老院は、時の統領をして「共和國の福利のために哲學者と修辭學者とが羅馬に居ることを許さざる旨」を告示せしめてゐる。それにも拘らず時代の大勢は制し難く、羅馬人にして修辭學校を開く者さへも漸く現はれ、前九二年に時の監察官は次の如き警告を發布してゐる。「聞く所によれば、或人々は昨今新しき種類の教育を始め、我國の青年が彼等の學校に集り、彼等は自ら羅甸修辭學者と稱し、青年はそこで終日を空費するとのことである。吾人の祖先は、子供等が如何なる教授を受け、如何なる學校に通ふべきかを規定して來た。この先祖の規定と風習とに反する昨今の新風潮に吾人は贊することと能はず、又それを善しと認めることも出來ない。故に吾人は、かゝる學校を開き又かゝる學校に出席しつゝある者に對して、吾人はそれを非と斷定する旨を告知するのは、吾人の義務であると考へるのである。」かくの如く修辭學校は羅馬の爲政家の壓迫を受けたにも拘らず、時勢は有能の士をして、自己の辯護のためにも世に名聲を博するためにも、修辭學（雄辯術）の必要なる所以を益々痛感せしめ、特に上流子弟のこれに赴く者が次第に增加して來たのである。但しこれが整備せる學校制度として隆盛を示したのは、帝政時代に入つてからであつた。

社會教育　上述の如き家庭教育及び學校教育を受けた後、男子は公民として社會の公共生活に參加する。男子十七歳の三月十七日を「チーローキニウム」(tirocinium)といふ。それは青年が新兵(tiro)として新に軍籍に入る日卽ち元服の日を意味するからである。この日に、青年は家族一同から祝福せられ、母の溫情溢るゝ訓言を受けた後、父や親戚・友人等に伴はれて、市場(フォルム)に行き、長官(プライトル)の前で、市民の制服たる白の外衣—所謂トガ(toga 或は toga virilis)—を着せられ、長官の訓告を受ける。次に社殿(カピトーリウム)(capitolium)に赴き神々に供物を獻じて國家の忠良なる市民たることを誓ふ。これ等の儀式終了後、祝宴が開かれ、その家族の親戚や知友の間に贈物が頒たれたのである。

一般下層階級の青年は元服と同時に父と共に農業若くは商業に就き、戰に召集せられない間は、その家業に從事した。上流の青年は元服後、舊き風習に從つて、各自の素質及び希望に應じ、「軍人候補」(tirocinium militae)「政治家候補」(tirocinium fori)「辯論家候補」(tirocinium eloquentiae)となり、夫々先輩に就て實地の教導を受けた。軍人たるべき者は、困苦缺乏に堪へるために身體を鍛錬し、每日チベリス河に浴して水泳を習ひ、又乘馬・狩獵・槍投等を練習した。これ等の訓練の後、軍營に加はつて實戰を經驗し、軍人として實地に修練を積んだのである。政治家たらんとする者は定評ある政治家に就き從つて、法律的並びに政治的事件の處理を手傳ひ見習つた。又法律を學ぶためには特定の法律家に私的教授を受け、先づ私法事件に關して實地に修練し、次に雄辯術をも修めて公の政界に働く樣になつた。辯論家候補者は、初期に於ては特定の辯論家に從つて直接に實地の活動に參加したが、やがては特に雄辯術の教師に就て學ぶことゝなつた。それも初めは「希臘語雄辯教師」(rhetor

graecus)に就て一定の課程を修めてゐたが、後に「羅甸語雄辯教師」(rhetor latinus)が現れるに及んでこれにも併せ就くことゝなつた。雄辯術は理論的學習たる講述(dissercre)と實地練習たる演習(declamare)とに分けて修練し、前者に於ては、教師が雄辯の本質や模範演說(例へばキケロの時代にはカトーやグラックスの演說)に就て解說し、後者に於ては、生徒をして特定の問題に關して贊成及び反對の議論、卽ち「說得演說」(suasoriae declamationes)と「反駁演說」(controversiae declamationes)とをさせたのである。

前二世紀の中葉、希臘本土が羅馬の屬領に歸して以來、希臘の哲學が羅馬に移入せられた。但しそれは純然たる眞理への憧憬からではなく、羅馬人本來の實踐的要求から、換言すれば辯論家・政治家として、身を修め、知見を磨き、有能練達の士となるための要具として、哲學が學ばれたのである。一方またこの時期の希臘哲學自身が、古典時代の純粹さと學的眞摯さとを失つて生活の方便化したものであつたが故に、哲學に關する限り、希臘と羅馬とは當時同じ雰圍氣の中に、彼から此へ傳播し感染して來たのである。卽ちそこでは、哲學諸思潮間の當初の區別は次第に曖昧化して折衷的色彩の下に採用せられた。併し就中實直嚴肅なる本來の羅馬的風習に適應するものとして、ストア學派の克己節欲の道德哲學が最も多く學ばれた。それに次いではエピクロス派の快樂主義道德哲學も羅馬の自由思想的・無信仰的・享樂的傾向の人々の間に相當迎へられた。又アカデメイア及び逍遙學派の哲學も、それ等の純理的色彩の故に、僅少の眞面目な研究的・思索的態度の人々の間に行はれた。吾々はこれ等希臘・羅馬哲學それ自身の論究をば一般哲學史に讓り、教育史としては後に、當時の羅馬の教育思想家達が受けたる教養として、これ等哲學諸流に就て再說するであらう。

因に當時は一般文化の進展と共に、女子の教養も一般に高められ、かのカチリーナ（Catilina）陰謀事件（64—62 B. C.）に參加せる女丈夫セムプローニア（Sempronia）の如きは、「希臘的及び羅馬的學識を教へられたる女」として讃へられてゐる。

尙ほ希臘學藝の移入と共に書籍の蒐集、筆寫、販賣等も漸く起り、共和時代末期に於て既に、筆耕人（scriptores, literatores）、手記（autographum）、書籍（codex）、書籍販賣人（bibliopolae）、書店（taberna libraria）等が存在したことを史家は傳へてゐる。

扨て以上の如く羅馬本來の教育が次第に希臘的教育に影響せられると共に、知育の方面は著しく內容と高度とを增したけれども、德育の方面は却て次第に衰頽しつゝあつた。羅馬人が伊太利半島を統一した時は、同時に堅實なる道德的・宗教的傳統を失ひ初めた時であつた。卽ちそこには個人主義的・利己的野心乃至は享樂的傾向が次第に萌しかけてゐた。果してその後の羅馬は外に益々世界的帝國の大を致しながら、內には內訌・黨爭が漸く露骨となり、紛亂の度を加へつゝ、共和時代の終焉に近づいて行つたのである。そしてかゝる道德的頽廢も亦希臘的學藝の移入と共に、憂國の志士の反省を促さずには措かなかつた。吾々はかくして今や共和時代末期の思想家による文化の批判、國民への誡告、卽ち教育思想に就て述べなければならない。

第二節　共和時代末期の教育思想

一　教育思想の發生とその全體的特色

教育思想の發生　何時何處に於ても教育思想は、一般文化並びに教育事實への批判・反省として發生する。そしてこの批判・反省は、文化及び教育の事態が何等かの新契機に依る變動乃至混亂を來して、心ある人々の注意を喚起することによつて始めて行はれる。恰も希臘の歷史に於て、古き希臘より新しき希臘への推移と共に教育思想が發生した如く、羅馬に於ても亦共和時代の末期に、國運の隆盛と希臘文化の導入とによつて、建國創業以來の羅馬的面目が漸く動搖し改變し來れる時に、それへの反省として教育思想が發生した。卽ち內外自他の文化が混合し新舊兩要素が對比的に眼前に現れたとき、人々は舊きものゝ長短を吟味し、新しきものゝ權限を檢討することの必要に迫られ、こゝに國民子弟をして何を如何にして學ばしむべきかといふことの問題——教育的反省——に向はざるを得なくなつたのである。

教育思想の代表者とその全體的特色　かくの如くにして共和時代末期に發生せる教育思想は、主として次の三人によつて代表せられてゐる。第一にカトー（Marcus Porcius Cato, 234—149 B. C.）は舊き羅馬的精神を最も鮮明に體現し支持して新しき希臘的風潮を極力排擊し、第二にキケロ（Marcus Tullius Cicero, 106—43 B. C.）は羅馬的精神の基調に立ちながらも希臘的教養を最も自由に豐富に學び採り、その人格と思想とに於てこの時代の最

も輝かしき精髄を指示し、第三にワルロー（Marcus Tereus Vorro 116—28 B. C.）は前二者の中間的地位に立つて複雜なる教養と方向とを併せ含み、移り行く世相を適確に表現してゐる。これ等三人の思想家を通じて吾々は併しなほ羅馬の國風が全く爛熟の域には到らず、依然として共和時代の堅實性に支へられてゐるのを見る。そして又これ等の人々の教育思想が未だ學的體系と根據とを有せずして、たゞその憂國經世の抱負主張の裡に斷片的に教育思想を藏してゐるに過ぎないことは、後の帝政時代の組織的教育思想と對比して、一般に時代の學的未熟さを暗示するものである。

二　カト　ー

その生涯　マルクス・ポルキウス・カトー（Marcus Porcius Cato）は、その曾孫に當るマルクス・ポルキウス・カトー・ウチケンシス（M. P. C. Uticensis）と區別するために、大カトー（C. Major）と呼ばれ、又彼の監察官としての峻嚴さの故に監察官カトー（C. Censorius）とも呼ばれてゐる。彼は前二三四年に、ラチウム州内の古都ツスクルム（Tusculum）に生れたがサビーニ州内なる父の農場に於て育てられた。先祖に就ては全く知られてゐないけれども、彼自身の語る所によれば、父は勇敢な武人らしき人であり、祖父も屢々戰功を立て、戰場に於て乘りつぶした五頭の馬に價する褒賞を以て、國家からその勇武を表彰せられたとのことである。羅馬人は、家柄の故ではなく自らの勳功によつて名聲を博した人々をば一般に「新人」（homo novus）と名づけることを慣習とし、カトーをも亦新人と呼んだ。併しカトーは、官職や名聲に於てこそ自分は新人であるが、それも實は遠き祖先の勳功と德とに負うてゐるのだと言つてゐた。彼の名は初めプリスクス（M. P. Priscus）であつたのを、後にその才幹の故にカトーと呼ばれたのである。それは羅馬人が賢明なることをカツス（catus）と呼んだことに由來してゐる。

前二一七年カトーは十七歳の若冠を以て初めて戰爭に出陣し、當時伊太利を荒し廻つてゐたハンニバルの軍と戰ひよく困苦缺乏に堪へて剛勇を顯はした。爾來この第二ポエニ戰役の間、屢々出征して戰功を立て、戰の閑暇にはサビーニの農場に歸つて、質朴な農耕生活に身を委ね、又附近の人々のために辯護士として無報酬で活動し辯論を修練した。

彼の近くに羅馬の勇將クーリウス・デンターツス（M. Curius Dentatus）が曾て住んでゐた小屋があつた。デンターツスはサビーニやサムニウムを征服し、エピルス王プユルルス（Pyrrhus）を放逐して、羅馬最大の偉勳を立てながら、而も自らこの小さき農場を耕しこの小屋に住んでゐたのである。曾てサムニムウの使者達がこの小屋を訪れたとき、主人は竈に身をかゞめて蕪菁を煮てゐた。使者達は多額の金を提供せんとしたが、彼は「こんな食物で滿足してゐる人に金の必要はない」と言つて、使者達を返した。そして金を所有することよりも、金を所有せる人を征服することの方が遙かに立派な仕事であると考へてゐた。カトーは實にこの偉人デンターツスの舊跡を屢々訪ねて、これ等の感懷に心打たれ、自らの生活に於て勞働を愛し奢侈を警める念を强くしたのである。

ファビウス・マキシムス（Fabius Maximus）が、やはり第二ポエニ戰役中に於て、タレンツムを占領したとき（209 B. C.）カトーもその下に屬して從軍したが　偶々プュタゴラス學派のネアルクス（Nearchus）といふ人に接しその教說を傾聽した。ネアルクスがプラトンの言葉を引用して、快樂は惡への最大の誘惑であると言ひ、肉體は精神の第一の障害であつて、精神は肉體的感能から出來るだけ離脫することによりその害を免れ純化せられると說くのを聞いて、カトーは益々質素と克己とを愛する樣になつた。

扨てカトーの農場の隣りに、知名の貴族ワレリウス・フラックス（L. Valerius Flaccus）といふ人が農場を持つて居り、その人はカトーの召使達から主人の人と爲りを聞いて感服し、一日會食に招待してカトーのすぐれた素質を知り、羅馬に於て公的生活に入るべきことを說得した。かくしてカトーは羅馬に居を移し、先づ辯護士として知己を增し、やがてワレリウスに引立てられて次第に政界に進出して行つた。卽ち前二〇四年には「財務官」（quaestor）となり、スキピオ（Scipio Africanus）

に從つてシシリー島及びアフリカに出征した。この間にカトーはスキピオの奢侈浪費をいたく憤激し、羅馬に還つてからこれを元老院に告發して彈劾した。(羅馬への歸途彼はサルディニアに寄り、既述のエンニウスを伴つて來たと傳へられてゐる。)更に前一九九年には造營官(aedilis)となり、前一九八年には長官(praetor)となつてサルディニアを管轄し、質素を旨としてよくこれを治めた。前一九五年に恩人舊友たるワレリウスと共に統領(consul)となり、西斑牙と戰つて大勝を獲、翌年羅馬に凱旋した。(この時戰場で使つた軍馬をば、國へ輸送するに要する國費を省くため彼地で賣却してしまつたことの如きは、彼の面目を示すに足る挿話である。)尙前一九一年には統領アキリウス・グラブリオ(Acilius Glabrio)に從つて、ハンニバルの援護者アンティオコス(Antiohos)を希臘に破り、特にテルモピュライの戰勝に功を立てた。この後カトーは主として內政に活躍し、國粹的思想を持して、貴族達の間に漸く高まりつゝあつた希臘的奢侈を警め、スキピオ一家の排擊には殊に力を盡した。前一八四年に、貴族側の猛烈な反對にも拘らずワレリウスと共に監察官(censor)に選ばれるや、益々極端にその主義を實行し、後述の如き峻嚴なる監察方針と希臘的國風の排斥とを敢てした。晚年(その歿する前年)カトーは羅馬の使臣としてカルターゴに赴いた。それはカルターゴ人とヌミディアのマシニッサ(Masinissa)王との間の紛爭の原因を調査する目的であつたが、彼はこの時第二ポエニ戰役後のカルターゴが毫も疲弊の色を有せず却て富物たる意氣を以て興隆しつゝある實狀を目擊し、羅馬に對するやがての脅威を痛感した。そして急遽歸國してこれを元老院に警告し、演壇に立つ度每に、その演題の何たるを問はず、常に「カルターゴは滅ぼされねばならない」(Delenda est Carthago)といふ標語を以て獅子吼した。かくて彼は第三ポエニ戰役の空氣を國內に醞釀せしめつゝ、前一四九年八十五歲を以て羅馬に歿したのである。

カトーの著述としては、羅馬の歷史を取扱つた『由來記』(Origines)、その息子への敎訓を書いた『童子訓』(Praecepta ad Filium)並びに『道德詩』(Carmen de Moribus)、農家の生活に於ける諸方面の運營を論じた『田園生活論』(Scriptores Rei Rusticae)があり、又キケロによつて賞讃せられた百五十の演說を遺してゐる。(Cicero, Brut. 65)これ等の中『田園生活論』を除く外は何れも今日斷片を傳へてゐるに過ぎないけれども、吾々はそれ等の斷片を通じて、カトーが如何なる思想

と態度を以て、羅馬の古き國風を擁護し、新來の希臘的國風を排斥したか、又その子供の敎育に於て如何にそれを具體化したかを窺ふことが出來るのである。

羅馬の國粹保存と希臘的國風の排斥　カトーは生粹の羅馬人的素質を具へ、質實剛健にして勤勞を愛し虛名を避け祖國への熱意ある關心を抱いてゐたのであるが、その身の榮達と共に、當時の上流社會に漸く浸潤しつゝあつた希臘的國風に接し、それとの對立によつて益々本來の性格を硬化して行つた觀がある。

プルタルコスの評傳によれば、カトーは雄辯に於て羅馬のデモステネースと呼ばれたけれども、併し彼に就て一層讃嘆せられたのはその生活態度であつた。蓋し雄辯家は既に先蹤があり、その理想は靑年達に取つて珍しくなかつたけれども、自ら耕し粗衣粗食に甘んじ、さゝやかなる住居に住み、生活に必要なるもの以上をば持ちもしなければ望みもしなかつた所の偉人は、實に珍しきものとして仰がれたからである。當時國土の膨脹と共に、樣々の風習や生活樣式が入つて來て、世の常人は或は勞苦によつて疲弊し、或は享樂によつて衰弱したのに對しカトーがその何れにも克ち、而も單に少壯血氣の間だけでなく、既に幾多の高官を勤め終つて老境に入つてからも尙その生活態度を變へなかつたのは、時人の感嘆を集めるに充分であつた。彼は實に卓越せる競技者の如く、不斷にその身を鍛錬し、最後までその心を變へなかつたのである。

自ら語る所によれば、彼は百ドラクメ(約四十圓)以上の價の衣服を用ひたることなく、長官や統領となつても奴隷と同樣の飮料を用ひた。魚や肉は三十アス(as)—一アスは約一錢—だけを市場から買つたが、それも彼が肉體を强健にして軍務に役立たせたいといふ奉公の精神からであつた。曾て刺繡のついたバビロニアの禮服を人

から贈られたが、彼は直ちにこれを賣却した。又その住居は何れも壁が塗つてなかつた。彼の使用した奴隷は價額千五百ドラクメを超えることなく、美しい奴隷よりも寧ろ頑强な奴隷を選び、そして彼等が老齢で用に立たなくなると、無駄な養育費を使はないで、直ちに賣却した。使ひ馴らした家畜や軍馬と雖も不用となれば無情に賣り棄てたのである。一般に彼は買はずに濟ますことよりも安價なものはないと考へ、不必要なものは假令僅かの價額でも高價であると考へてゐた。かゝる生活態度はプルタルコスの批評してゐる如く、吝嗇又は冷酷とさへ思はれる程であつたが、而も彼はそれによつて國帑の支出を減じ收入を增さんとする愛國心を發揮したのである。故に治者としてのカトーは實に謹嚴恪勵そのものであつた。彼は曾て長官としてサルディニアを管轄してゐたとき、唯一人の奴隷を從へ徒步で領内を巡察した。又常に自ら語る所によれば、彼は未明に起き出で、私事を全く放擲して、終日公事に盡瘁し、そのために反對者の怨嗟を招いたとのことである。そして又彼は、惡事を爲して罰を受けないことよりも、寧ろ善事を爲して報酬を受けないことを望み、且つ他人の過失はすべてこれを恕し、自らの過失は毫もこれを許さないと言つてゐた。併し彼が監察官として、一貴族マンリウスをば、白晝その娘の面前で妻に接吻した故を以て、放逐した如き事例を見れば、他人の罪過を責めるのに、如何に峻嚴であつたかを窺ふことが出來る。彼は國民の奢侈に對して重稅を課し、又冗談に、市場を尖つた石で敷きつめて怠惰な者共が寢ころぶことの出來ぬ樣にせよ、などゝ言つて、國民の懶惰遊逸を警めた。

かくの如きは實に勤勉實直なる羅馬本來の國風を最も極端に保持し發揚したものであるが、他方カトーは希臘文化の導入が、國民の奢侈逸樂の禍根であるとし、極力希臘風の排斥のために奮鬪した。彼は曾て希臘に出征

し、通譯を介してアテナイ人と語つたことがあつたが、その時彼の簡潔な言葉が冗長な希臘語に通譯せられるのを聞いて、アテナイ人が驚いたと言つてゐる。そして、又概して希臘人の言葉は口から出るが羅馬人の言葉は肺腑から出ると思はれたと彼は言つてゐる。前一五五年にアテナイは、アカデメイア學派のカルネアデース（Karneades）やストア學派のディオゲネース（Diogenes）等を使者として羅馬に遣はし、アテナイ人に與へられた或る不利な訴訟判決を取消されんことを乞うて來た。元老院がこの事件の決定に荏苒日を送つてゐる間に、彼等哲學者は羅馬人の狂熱的尊信を受けその雄辯に魅せられて青年達は彼等の講筵に雲集した。カトーはその狀態をいたく憤激し、元老院に向つて、早くこの事件を決定し、希臘哲學者をして速かに故國の學校に歸つて希臘の子弟を敎へしめ、羅馬の青年をば舊來の通り國法と長官とに傾聽せしめよ、と警告した。カトーは哲學及び一般希臘文化を甚だしく嫌惡し、ソクラテスをば空論を弄び國風を破壞し國民をして國法に背かしめたものであると非難し、又イソクラテスの學校を嘲罵して、その學生は老年に至るまで政治學を學修し冥界に行つてからミノースの前でそれを論ずる積りでゐると揶揄した。かくて彼はその子を警めて、羅馬は希臘の文字に充されるときその國を失ふであらうとまで說いたのである。プルタルコスによれば、カトーは（希臘語を學び希臘語の書籍を讀んだのは晩年であるが）早くより希臘的敎養を具へて居り、その演說に於て巧みにツキディデスやデモステネースを引用し、又彼の著述は希臘の物語や情調によつて修飾せられ、彼の唱道した格言や標語は希臘文學からの飜譯を多く含んでゐた。それにも拘らずカトーの思想と生活とは常に羅馬的精神によつて貫かれ、反希臘的愛國の志士として彼は史上に足跡を印したのである。

教育の實踐及び思想　監察官として羅馬國民の教育者であつたカトーは、よき夫、よき父として、家庭教育の最も典型的な擔當者であり、治國の熱意にも劣らざる顧慮と才能とを以て齊家の事に盡力した。妻や子供を毆打する男は、彼の言ふ所によれば、神聖なるものゝ中の最も神聖なるものに暴力を加へるのである。そして又善良なる夫は偉大なる元老よりも更に賞讃に値するものである。古のソクラテスに於て讃ふべき點は、そのロやかましき妻と愚鈍なる子供等とに對して優しく接したことに存する。

かゝる見解を抱けるカトーは、その息子の生れるや、公事の外には何事にもまさつて息子の教育に熱中し、妻が息子に入浴させたり襁褓を着せたりする時は必ず側に附添つてゐた。妻も亦賢母であつて、自ら子供を養育し、その奴隷の子供等にも我が子と同じく乳を與へて、彼等の間に同胞の親しみを感じさせる樣にした。息子が物心つく頃になるとカトーは自ら讀書を敎へた。彼にはキローン（Chilon）といふ立派な敎師が奴隷として雇はれてゐたが、彼は子供の敎育の如き貴重なる仕事を奴隷に任せるに忍びなかつた。かくて彼は讀書のみならず、法律に於ても、體育に於ても、自ら子供の敎師となつた。そして槍投・武器の操作・乘馬・拳闘等を練習せしめ、寒暑に堪へる鍛錬を施し、チベリス河の急湍渦流に泳ぐことを敎へた。彼は又息子をして祖國の歷史を知らしめ、偉大なる先人の感化に浴さしめんとして自ら羅馬史卽ち既述の『由來記』（Origines）を書き與へた。更に希臘學藝への感染を防ぐために、羅甸語を以て羅馬的精神に基ける『童子訓』（Praecepta ad Filium）を書き、健康法・農業・雄辯・軍事・法律諸般の事項を簡潔なる訓言に纏めて、子供に與へた。その訓言の多くはカトーの面目を反映する頑固偏狹なものであつたが、中には眞に傾聽すべき金言も含まれてゐた。「事柄を把握せよ、言葉はおの

づから從はん」（Rem tene, verba sequentur）といふが如きはその一例である。又すぐれたる雄辯家の條件として、率直健全なる理解力、强固なる心情、迫力ある辯舌の才を擧げ、特に、善良なる人のみ眞の雄辯家たり得べきことを高調した。更に彼の『道德詩』（Carmen de Moribus）には例へば、吝嗇及び貪慾（avaritia）、未だ詩なく詩人なかりし古の堅實なる時代、人生は鐵の如く磨かざれば錆を生ずるといふ譬喩などを含んでゐた。尙カトーには他の人々の金言名句を集めた『金言集』（Apphthegmata）の著があつたと言はれてゐる。

カトーの生活と思想とは、かくの如く謹嚴實直にして永遠の敎訓を含めるものであつたから、彼の名を以て傳へられた諸々の訓言は、羅馬時代及び中世期を通じて、少靑年並びに大人の讀物として廣く愛誦せられた。ハドリアヌス（Hadrianus, 117—138 R.）帝の時、羅馬國粹家肌の修辭學者にして偉大なる敎育者たりしコルネーリウス・フロント（Cornelius Fronto）は、カトーの言行・功業を絕讃し、伊太利のすべての都市は彼の銅像を建つべきことを奬めた。羅馬のクィリーナーリス（Quirinalis）丘上なる國家守護の女神サルス（Salus）の神殿にはカトーの銅像が建てられ、次の如き文字が刻せられた。「カトーは惡に傾き沈む羅馬國家をば、適切なる救治策、賢明なる訓練と指導とによつて、再び起上らしめた。」これは實に彼の功績を最も明確に特色づけた言葉である。

カトーはかくの如く國粹的志士として、反希臘主義者として、政治に敎育に畢生の奮鬪を續けた。併し「荒野の說敎者」に比すべき彼の熱烈なる敎說も滔々たる時代の大勢を輓回することは出來ず、新しき希臘的國風は愈々羅馬の人心に浸潤して行くのであつた。そしてこの大勢に反抗する代りに、よくこれに乘じこれを利用して、時代の典型的人格と思想とを練成したのが、次に述ぶべきキケロである。

三　キケロ

その生涯　マルクス・ツルリウス・キケロ（Marcus Tullius Cicero）は前一〇六年に、ラチウム州内のアルピーヌム（Arpinum）市の近郊に生れた。母ヘルウィア（Helvia）は名門の賢夫人として有名であるが、父方の家柄については明かに知られてゐない。キケロといふ名は「埃及豆（キケル）」（Cicer））を意味し、彼の先祖に、鼻の先が豆の裂目の如き窪みを有する人があつて、この名を得たのであらうと言はれてゐる。叔父のルキウス（Lucius C.）は雄辯家アントーニウス（M. Antonius）の友人であり、キケロ一門の中にも雄辯家があつた。キケロは弟のクィンツス（Quintus C.）と共に教育せられたが、この二人の兄弟の聰明好學の故に、父は羅馬に居を移し、其處で良師を選んで二子の教育を託した。その師の中で特に有名なのはアンティオケイア（Antiocheia）の詩人アルキアス（Archias）であつた。元服の後ト占者にして元老院の有力なる政客ムキウス・スカイウオラ（Q. Mucius Scaevola）に就て法律を學んだ。前八九年に統領ポンペイウス・ストラボ（Pompeius Strabo）に從つて伊太利諸市と戰つたのは彼の生涯を通じて唯一回の從軍であつた。かのマリウス（Marius）とスルラ（Sulla）との内亂の間にはキケロは何れの黨派にも屬せずして、專ら法律・哲學・雄辯術の研鑽に沒頭した。卽ち哲學をば當時羅馬に滯在せるエピクロス派のファイドロス（Phaidros）、アカデメイア派の領袖ブィローン（Philon）及びストア派のディオドトス（Diodotos）に學び、雄辯術をばロドスより羅馬に來た使臣モローン（Molon）に就て學んだ。内亂がマリウス黨の勝利によつて平和に復するや、キケロは辯護士としてクィンツス其他の人々のために法廷に立ち、その雄辯と正義に對する熱意果敢の故に名聲と信望とを博した。併し間もなく前七九年に彼は希臘に渡つた。それは表面上は健康のためであつたが、事實は多分スルラ殘黨の復讐を恐れたからであらう。彼は先づアテーナイに六箇月を過し、アスカロンの人にしてアカデメイアの學者たりしアンティオコス（Antiochos）に哲學を、デーメートリオス（Demetrios）に雄辯術を學び、又生涯の親友ポンポーニウス・アティックス（Pomponius Atticus）を得た。それより小亞細亞に渡り、アドラミュッティオン（Adramytteion）のクセノクレー

ス（Xenokles）、マグネシア（Magnesia）のディオニュシオス（Dionysios）、カリア（Karia）のメニッポス（Menippos）等を訪ひ、つひにロドス（Rhodos）島に渡つて、先師モローンの子なるアポローニオス（Apollonios）に雄辯術を學び・ポセイドーニオス（Poseidonios）に哲學を學んだ。この時アポローニオスは羅甸語を語らなかつたので、キケロに希臘語を以て演說すべきことを命じた。キケロはこの機會に自分の希臘語の缺點を矯正せられることを望んで熱心に演說した。居合せた人々はその巧みさに驚嘆して互に顏を見合せた。アポローニオスは默して深く物思ひに沈んでゐたがキケロがこれを憤つたのでやつと口を開いて叫んだ。「キケロよ！　余は實に汝を賞讃し驚嘆する。だが余は希臘の運命を憐む、何故ならば吾等希臘人に殘されたる唯一の名譽が―教養と雄辯とが―汝によつて羅馬人等に奪らされるのだから。」と。キケロは希臘的教養に於て實にかくの如く卓越し、一たびは故國の政治的煩累を厭つてアテーナイを墳墓の地と定めんとする底意さへも抱いてゐたのであるが、前七八年スルラが歿し、且つ故國の知己と希臘の恩師との熱心なる勸說があつたので、前七七年に羅馬に歸つた。回復せる健康と愈々進歩せる雄辯の才能とを以つて彼は公共生活に進出し、前五七年にはシシリー島に財務官として赴き、翌年羅馬に歸り、それより、造營司、長官等の官職を經て、前六五年には統領となり、これより政界の中樞に活躍することゝなつた。彼は當初より民黨と閥族黨との何れにも偏せざる立場にあつたが、統領となつた後は、庶民側の革命を防止し國家を安泰ならしめるために自らを保守的閥族黨に結合し、ポンペイウス（Pompeius）をこの計畫に推載せんとした。併しカイサル（Caesar）とクラッスス（Crassus）とポンペイウスとが第一回三頭政治を組織して（前六〇年）、元老院に對抗するや、キケロはこの三頭政治に好意を持ち得ず、從つて彼等の勢力に保護せられることも出來ずして、他方民黨の護民官クロヂウス（Clodius）と激しき反目に陷り、身の危險を感じて前五八年に羅馬を逃亡し、マケドニアのテッサロニケ（Thessalonike）市に身を寄せて、憂愁の日を送つた。翌五七年羅馬に於ける友人達の熱心なる召喚によつて彼は歸國した。前五二年に不本意ながらキリキアの統治者として赴任することを强ひられ、任地に於て國王の如くに振舞ひ、前五〇年羅馬に歸つた。時恰もカイサルとポンペイウスとの内訌が起り、彼はポンペイウスに味方して出征したこともあつたが、併しカイサルは彼に對して好意と尊敬とを失はなかつた。そしてキケロ自身も大部分はこの内訌の渦中から身を避けて、著作に精進し

た。然るに前四四年カイサルの暗殺後彼は再び政界に出てブルータス（Brutus）に味方し共和黨に屬して活躍し、後更にオクタウィアヌスに近づきアントニウスとオクタウィアヌスとの接近を妨止せんとしたが成らず、彼等の間に第二回三頭政治が成立するや、キケロはその敵として處刑を受けねばならなかつた。彼は危險を避けて諸方を逃げ廻つてゐたが、つひにラチウム州の海岸なるフォルミアイ（Formiae）市に於て追手の兵に殺された。時に前四三年、彼は六十四歳であつた。彼の頭と手とは切られて羅馬に運ばれ、アントニウスの命によつて市場の演壇に釘付けにせられた。

後年オクタウィアヌスがその娘の子供等を訪ねたとき、偶々キケロの書物を持つてゐた一人の子供が恐れてそれを外套の下に隠さうとした。併しオクタウィヌスはその書物を手に取り、立所にその大部を讀破して、子供に返しながら、「子供よ、この人は賢い人だ、賢い人だ、愛國者だ。」と言つた。オクタウアィヌスは又キケロの子を高官に登用し、更に彼の治下に於て元老院はアントニウスの銅像を撤回し、幾多の名譽を剝奪し、その一門が「マルクス」といふ羅馬人慣用の姓を用ひることを禁止した。これは實にキケロに對する羅馬國民の好意と尊敬とを反映するものである。

キケロは羅馬第一の思想家且つ健筆家であつて、その著作は、雄辯術・政治學・倫理學・形而上學・神學等の各方面に亘り、更に各種の揚合、各種の人々のためにせる辯論及び書翰を併せて實に浩瀚なるものである。それ等の中特に教育思想を窺ふに足るべき主要文獻は『國家』（De Republicae）・『法律』（De Legibus）・『至高善と至高惡』（De Finibus Bonorum et Malorum）・『ツスクルムの論爭』（Tusculurnae Disputationes）・『大カトー又は老齢』（Cato Maior sive De Senectute）・『ライリウス又は友情』（Laelius sive De Amicitia）・『義務』（De Officiis）・『神性』（De Natura Deorum）・『ムーロ』（De Divinatione）・『運命』（De Fato）・『考案』（De Inventione）・『雄辯家』（De Oratore）・『雄辯家ブルツスへ』（Ad M. Brutum Orator）・『ブルツス又は名雄辯家』（Brutus sive DeClaris Oratoribus）・『雄辯斷章』（De Partitione Oratoria）等である。但し今日に傳はれるものは多くはこれ等各々の斷片に過ぎない。

思想の全體的特色　上述の如き生涯が明示する如く、キケロは羅馬人的性格を希臘人的教養によつて洗錬し、この兩文化の融合せられ行く時代相を躬ら體現せる者であつた。純粋の羅甸種族として生れ、羅馬風の堅實なる家庭教育を父母に受け長じて希臘學藝の各部門を夫々專門教師に就て學び、更に希臘及び小亞細亞に遊學し、歸つて祖國の政界に生命を堵して奮鬪し、而もその間の閑暇を各種學藝の研鑽と著作とに費した彼に於ては、羅馬人的なる實踐（プラクシス）と希臘人的なる觀照（テオリア）とが誠によく調和してゐた。それ故に彼は、羅馬國民によつて「愛國者」・「救世家」と讃へられたと共に、「自らの有する一切の人間的教養、特にも高等なる學問的並びに藝術的識見は希臘人に負うてゐる」と自白したのである。

キケロの思想家的業績は、主として修辭學と哲學と教育思想とに求められるのであるが、これ等何れの領域に於ても上述の希臘羅馬兩要素の融合が見られる。卽ち第一に彼は羅馬第一の雄辯家・名文家として羅甸語散文修辭法の典型を遺し、今日に至るまで古典的羅甸語の代表者と仰がれてゐるのであるが、その語彙に修辭に引用句に彼は多くの希臘的要素を交へ、それによつて從來の卑俗なる羅甸語を洗錬し醇化し整頓したのである。第二に哲學者としての彼は希臘哲學の諸契機を攝取しながらこれを羅馬人的、實踐的要求より折衷した。從つて哲學史は何等の創見をも彼に歸する所がないのであるが、この事は偶々彼の本來の地位を語るものであり、延いては彼を有力なる一代表者とする羅馬哲學の全體的面目をも暗示するものと見なければならぬ。第三に彼の教育思想は、上述の修辭學者・哲學者としての彼の思想を教育の領域に具體化したものであるから、吾々は次に項を改めてこれを叙述し、それに於て上の第一・第二の點をも窺ふことにしたいと思ふ。

一般教育思想　キケロは教育の本質をば、人間先賦の素質の完成と觀た。そして人は萬物の靈長であり、人の精

神の最高機能は理性に存し、理性の完全なる實現が德であり、而してこの理性は注意深く發展せしめることを必要とするが故に、教育は人に於て特に重要である。人は自己を深く省みることによつて内に神的なるものを見出すであらう。これを自己に内在する神の姿と考へるとき、この貴重なる賜物を損ふが如き言行を慎まざるを得ない。換言すれば人は本來善への素質を潜在的に具へてゐるのであつて、それを教育によつて實現しさへすれば、善に導かれ幸福に到り得るのである。キケロにあつては、「幸福なる生活」(Beata vita) が人生最高の目的であり この「幸福なる生活に到るの途は德 (Virtus) そのもので充分であり」そして「人は哲學によつて善き强き人 (Vir bonus et fortis)(有德の人) とせられる。」こゝに彼が「哲學」と言ふのは理性の啓培に外ならぬが故に、理性の教育こそ人を有德卽幸福に到らしめる所以であつて、この思想はまさしく希臘哲學を貫く根本原理である。

キケロは併し教育を以て單に個人の幸福の途とのみ考へることなく、それが同時に國家のためであると考へてゐた。「吾人は青年を教へ導くことより更に大なる若くは更によき奉仕を國家になし得るであらうか」(Quod enim munus rei publicae afferre maius miiusve possumus, quam si docemus atque erudimus iuventutem?) 特にも現時の道德的頽廢の故に迷路に陷らんとする我國の青年達を引留め正しき道に向はしめんが爲に異常の努力を要する時に當つては、(教育は一層重大なる報國の途である)。勿論この學問 (哲學) に向ふ者は少數に過ぎないかも知れぬ。併し少數でも結構だ。その人々の努力は國家に絶大なる影響を與へるであらうから。」キケロが哲學に關する著作に精進したのは實にかゝる教育報國の意圖に基くものであつて、これはプラトーン・アリストテレース等の希臘哲人の先蹤に倣へるものである。而も羅甸語を以て書いたのは、彼の告白によれば、羅馬人が希臘

語の哲學書から離れて哲學を修め得んがためであつて、こゝに彼の國粹思想が現れてゐるのである。

扨てすべての人々に共通に必要なことは、早くより善への萠芽を助長し、惡の根源たる感能的享樂を斷つことであつて、そのために最も重要な教科は宗教である。神への敬虔なる心情を培ひ、迷信を根絶して、よき傳統的信仰を國家のために維持しなければならぬ。「國家はその究極最高の基礎を宗教に置くが故に、國民は早くより、神々が萬物の支配者であり人生の利害の洞察者であることの信仰に導かれねばならぬ。それによつて人は愚かしき驕慢や罪惡から免れ、タレースの言へる如く、人の見る一切は神々に充たされてゐる、との敬虔な心情になるであらう。そしてそのときこそ人々は神殿に在る時の如き清淨な心を以て生活するであらう。

よき傳統的信仰の保持を主張したキケロは又羅馬の古き國法にも絶大の尊敬を拂つてゐた。「若し何人かゞ法律の資源を求めるならば、十二銅板法の唯一冊の書籍は、あらゆる哲學者の藏書にも優つて、權威と效益とを有するに相違ない。」彼はかく絶讃して、リュクルゴスやドラコンやソロンの法制に比べてそれが如何にすぐれてゐるかを說き、羅馬の先輩が法制的識見に於て希臘人その他のあらゆる國民にも優つてゐたことを誇り、法律の學修は辯論家たらんとする者の必須の要件であることを指摘してゐる。吾々はこゝにもキケロの國粹的思想を見るのである。

キケロは又兒童の心的發達について詳密に觀察し、これを前提として教育の任務を說いてゐる。卽ち彼は先づ動物發達に一瞥を與へた後、人類の發達に推論し、「初生兒は極めて弱く殆んど精神を有せず、やがて僅かの力が生ずると手足と感覺とを練習し初め、立つことや手を動かすことを努め、又自分の養育者を認知する。それから

他の兒童等と交ることを喜び、遊戯を好み、物語を聞きたがる。又自分が餘計に持つてゐるものを他人に與へて喜び、家の内に見出す物事に好奇心を抱き、考へたり學んだりすることを始め、會ふ人々の名前を知りたがる。仲間と競爭しては勝利を誇り敗北に落膽する。そしてかゝる發達の各段階に於てあらゆる德への素質が見出され、その素質は格別の教授を要せずして、德の僅少なる模範によつて喚醒まされ、この内在的な種子がやがて德の芽を發し花を開くのである。即ち人は生れながらにして活動・勤勉・寛大・親切等の本能を有し、又認識・思慮・勇氣の素質並びにそれへの反對に對する嫌惡を具へてゐる。これ等の先天的能力よりして哲學者の理性の光も點ぜられ、この光を神的な導きとして進むとき、本然の目的に到達する。併し人が未熟で知的に幼稚な間は、吾人の本然の力は霞に蔽はれて明かでなく、長ずるに從つてそれを自覺し、且つそれ自らに於ては未だ不完全であつて教育により更に發展させねばならぬことを知るに至るのである。」かゝるが故に吾人は、アポロンの『吾等自らを知れ』(noscere nosmet ipsos) といふ言葉を實現するために、吾人の心身の諸能力を知りそれ等の全き實現に努力しなければならぬ。この全き自我の實現にこそ「至高善」(summum bonum) は存する。そして自我の完成は諸能力各々を完成することに外ならぬのであるが、但し肉體の完成は精神の完成の基礎としてのみ必要であつて、精神の價値に對する肉體の價値は太陽に對する星の如くに微々たるものである。因にキケロは希臘的體育をば全く非難し、その道德的弊害を好んで指摘してゐる。

キケロは又兒童に對する環境の重大性を考へ、環境の力によつて、正しき用語や思想の高貴なる表現さへも制約せられることを說いた。又賞罰の注意を述べて、すべての罰は、言葉によつてゞあれ行動によつてゞあれ、何

等の侮辱を含むべきではなく、又それは罪過に適應し、且つ同一の場合には同一の衡平さを以てなさるべきこと、又怒を以て罰することは中庸を失ひ易きが故に假令叱責の場合にも怒や不機嫌を混ずべきでないこと、そして叱責された者は、吾々叱責者が一層の苦痛と不快とを自ら忍びつゝも彼のために敢て叱責したのであることを知らねばならぬこと等を指示してゐる。

キケロは更に生徒に對して、その教師及び學校に感謝を捧ぐべきことを勸めてゐる。「吾人の中、立派な教育を受けたる者にして、その教育者、その教授者、指導者に對し、又その精神を培ひ養はれたる無心の場所に對して、内心深く感謝の思ひ出を有たざる者があり得ようか。」その感謝の念は特に國家に對する獻身的な愛によつて表現されねばならぬ。換言すれば人は國家のために教育せらるべく、祖國が吾々國民を生み教育するのは、吾々が何等祖國への奉仕をなさずして自己の安逸を求め世上の煩累から逃避して安靜に暮すためではなく、寧ろ精神と才幹と識見との最大多數を祖國の利益のために要求し、その剩餘だけを吾々個人の私用に供せしめるためである。それ故に吾人は國家を益するに足る學藝を學ばねばならぬ、それが智の最大の仕事であり、德の最大の顯現最高の活動であるから。

キケロは名譽心をば教育の主要動力として尊重し、それを善への本質的動因と考へた。國家はその法制に於て、國民が懲罰の恐怖によつてよりも寧ろ名譽心によつて惡から遠ざかる樣に工夫しなければならぬ。既に兒童に於て、その遊戯は人間性を示現するのであるが、名譽心は最も有力有效に働いてゐる。この心情はあらゆる手段を以て涵養促進せらるべく、而も單に青少年期に於てのみならず、成人期に於ても、善への最も强き刺戟であ

り、惡に對する最も忠實なる防禦者である。

キケロは羅馬の思想家中特に教育に於ける個性の尊重を力說した人である。而も彼によれば、子弟は各自が、自らの素質を內省吟味し、自己の長短の最も嚴しき裁判官とならねばならぬ。この事は少青年期にあつては就中重要である。蓋しこの時期は模倣性に富み、又師長の尊重する所に傾き赴くからである。

最後にキケロによれば、青年期の最大の危險は性慾及び感能的傾向に存するが故に、教育者はこの點には特に注意を拂はねばならぬ。そして享樂に對しては心身を武裝せしむべく、そのためにはあらゆる軟教育を排して硬教育を施し、心身の勞作をすゝめ、本然の羞耻心・名譽心を涵養すべきである。假令青年が勞苦の休養として享樂を求める場合にもその度を過さぬ樣に注意し、且つ常に禮儀を守り、他人の批評を眼中に置かねばならぬ。

辯論家教育論　以上はキケロに於ける一般的教育思想の要點であるが、彼は辯論家の養成に就ては特に論を成してゐる。辯論家は羅馬に於ては、論客・政客として法延や議場に活躍する人である外に、教師であり著作家であり牧師でもあつて、一般國民の齊しく憧憬せる理想人であり、キケロの言へる如く、「羅馬が世界の大國家となり平和が齎らさせれたる後は、功名の野心ある青年にして、辯論術の達成に一切の努力を傾けんことを考へざる者は殆んどなきに至つた。」特にキケロにあつては、眞の雄辯家は卽ち眞の有德者であるが故に、彼の辯論家教育論は一般教育思想を特に羅馬の當時の國情に照して具體化せるものと解し得べく、從つて羅馬的なる教育の理想と內容と方法とを見る上に頗る重要性を有するものである。

キケロによれば、將來の辯論家に必要なるものは、先天的なる素質及び才幹と基本的教養とである。就中主たる條件は豐富なる素質である。「青年がその音聲・容姿・動作其他の性質に於て辯論家たるに適してゐさへすれば彼が多少性急な又餘りに熱烈過ぎる口調・話し振りを有つてゐても、余は敢て彼を拒ばまない。余は豐富な精神力を感ぜさせる樣な、……そして多少それを剪り詰める餘地のある樣な青年を好むのであるから。そして余は青年が同時にすぐれた善良な人である場合にのみ、辯論術の修養に熱中すべきことを勸め、若し如何に努力しても中等程度の力しか發揮し得ない青年に對しては寧ろ方向を他に轉ぜんことを望むのである。

第二に併し、先天的なる素質及び才幹を有する者も、その準備時代に於て普く基本的教養を積むことが必要である。何故ならば有爲の辯論家たるべき者は、辨證論者の鋭さ、哲學者の豐富な知識、詩人の表現法、法律家の記憶力、名俳優の音聲・身振等を具へてゐなければならぬからである。そして辯論家たるべき者は不斷に辯舌そのものを練習する必要がある。「人はよく語ることによつて、よき語り手となり」「わるく語ることによつて、必ずわるき語り手となる。」故にキケロは、卽席演說をも尊重はしたが、併し充分に準備して演壇に立つことの方が一層よいとした。特に筆に書くことをば、內容を精細に知り、構想を周到にし、用語を適確巧妙ならしめること等のために最も有益なる準備として奬めた。「書くことは辯論家に取つて最もよき示範者であり教師である。」尙キケロは希臘の名詩・卓論を學んだり、それ等を羅甸語に譯したりすることが、雄辯術の修練に有效であることも告白してゐる。

次に辯論家はその語るべき內容に就て知識を有たねばならぬ。「知識なくしては如何に流暢なる言葉も空虛であり滑稽である。」この見地よりキケロは辯論家が、歷史を學び特に羅馬古來の法制や慣習に通曉すべきこと、哲學

の各部門に亘つての知識、特に實踐哲學即ち人間生活に關する知識を有すべきことを說いてゐる。併し哲學者の有する知識の外に、辯論家は人間のあらゆる性情とそれを動かす原因とに關する知識を必要とする。換言すれば辯論家は單に自らが知識を有するのみでなく、その知識を他人に向つて有效に働かしめねばならぬが故に、人間の感情や理解力を知り、且つ憤怒や悲哀や憎惡等を起さしめ又それ等を反對の心情に轉ぜしむべき原因を知らねばならぬ。勿論これ等の知識は哲學者も有するものであり、その他あらゆる知識に於て哲學者と辯論家とは異なる筈はないのであるが、唯その知識を得る目的が兩者に於て異なるのである。即ち哲學者は自己一身の閑暇を樂しく過すために知識を追求し、雄辯家は人を感化感動せしめ、國家を益するために知識を獲得し活用するのである。キケロのこの見解は、希臘末期の哲學者と本來の羅馬人的面目との對比をよく指示せるものである。

かくて結局辯論家の本領は知識を具へて且つそれを表現する修練を積むことである。ソクラテスが「すべての人は自ら知れる事に關しては雄辯家である。」と言つたが、キケロによればこの言葉は未だ眞を盡して居らない。勿論知識は必須條件ではあるが、併しそれを表現する言葉を如何に整へ磨くべきかを知らなければ、眞の雄辯家になり得ないのである。ソクラテスの言葉は、空虛なる辯論を弄ぶ當時の所謂ソフィステス達への警告であるが、キケロの批評は偶々ソフステス的雄辯家とキケロ的雄辯家との相違を指示してゐる。

因にキケロは雄辯家の基本的修養として前述の如く歷史や哲學を勸めながら、政治學に對しては青年がこれに關與することに反對した。即ち青年が政界の動きに心を動かされ、徒らに功名榮達に憧れて精神を損ふことを惧れた彼は、政治學をば、既に充分圓熟せる精神と性格とを前提とする學科と考へ、それは賢人大市民にして殆んど神的なる人の仕事であるとしてゐる。

辯論家の陶冶理想と陶冶內容とによつて具體化せられたキケロの教育思想は、その後紀元第一世紀にはクィンチリアヌス（Quintilianus）によつて繼承せられ、第四世紀にはラクタンチウス（Lactantius）、第十二世紀にはサリスベリー（Salisbury）、第十四世紀にはペトラルカ（Petrarca）、第十六世紀にはエラスムス（Erasmus）によつて夫々復活顯揚せられた。殊にペトラルカやエラスムスを機緣とする人文主義運動の進展は勢の趨く所つひに十五六世紀の教育的關心をして專らキケロの模倣に集中せしめ、所謂「キケロ主義」（Ciceroniaism）を現出せしめるに到つた。キケロの教育史上に於ける重要性は、かくして爾後の教育史を通じて屢々想起せられるであらう。

四　ワルロ

その生涯　マルクス・テレンチウス・ワルロ（Marcus Terentius Varro）は前一一六年にサビーニ州の古都レアーテ（Rieate）に生れた。初め羅馬の文法教師アイリウス・スチロ（L. Aelius Stilo）に就て學び、後はアカデメイアの哲學者アンチオコス（Antiochos）を師とした。これ等の師は何れもキケロの師でもあり、キケロとワルロとは友人であつた。ワルロは海軍の司令官として戰功があり、又ポンペイウスの副官・代將として西班牙に出征したが、カイサルがポンペイウスを亡ぼすに及んで、彼は部下の軍をカイサルに讓り、自らは希臘に渡つて暫時滯在し、後カイサルに許されて、書籍の蒐集整理の監督者として使はれた。この後彼は蟄居して文筆に親んでゐたが、やがて第二回三頭政治の出現と共に彼の生命は危險に瀕したので暫時逃亡して身を隱し、後オクタウィアヌスに保護せられ、財產の大部分も回收することを得たが、その浩瀚なる藏書は殆んど壞滅に歸した。晚年は平安の中に研究を續け、前二八年八十九歲を以て歿した。

彼は羅馬第一の博學者と言はれ、その著書も七十四部六百二十卷に上つたと言はれてゐるが、今日その一部の傳はれるものゝ中主なるものは、『田園生活論』(De Re Rustica)・『羅甸語論』(De Lingua Latina)・『學科論』(Disciplinae)・『兒童教育論』(Catus de Liberis Educ ndis)・『諷刺詩』(Saturae) 等である。

教育思想　ワルロは或意味に於てカトーとキケロを綜合せるが如き地位に立つてゐる。即ち一方に彼はカトーの如き謹嚴率直なる性格を以て古の良風時代を慕ひ、あらゆる方面に眞の羅馬的なものを求めながら、他方にはキケロの如く希臘の學藝を愛好し、希臘に關する博學多識をその著述に於て實證した。カトーが監察官として又著作家として當代の道德的頽廢と戰つた如く、ワルロは鋭き諷刺を以て當代の弊風を酷評し、その改善に努力した。彼の『諷刺詩』は實に古の羅馬の質朴敬虔なる國風の讃美と當代の墮落の攻擊とに充たされ、又婦人の間にまで浸潤せる虛榮奢侈の大勢に對立して、田園生活の單純さと善美さとがそこに描かれてゐる。

兒童教育に關する著書『兒童教育論』は、嚴肅愼重な教育家が、硬軟中庸の立場に立つて述べた教育思想を盛り、又環境や交友が兒童に與へる影響に就ての警告、女子に對する裁縫の勸奬等を含んでゐる。學校の教授科目に就ては、『學科論』九卷に九自由科即ち文法 (Grammatica)・辨證法 (Dialectica)・修辭學 (Rhetorica)・幾何學 (Geometria)・算術 (Arithmetica)・星學 (Astrologia)・音學 (Musica)・醫學 (Medicina)・建築學 (Architectura) の各々に亙つて百科全書的に述べてあり、これは中世期に續出したこの種の書物の原型となつた。これ等の學科目を學校の教科とすることに於て、ワルロその人が假令羅馬人的性格を保持したとしても、時代の大勢は既に羅馬の希臘化に向つて滔々と進みつゝあつたことを、窺ひ得るであらう。

第二章　帝政時代の教育

第一節　帝政時代の國風と教育事實

アウグスツスの治世と羅馬黃金時代　ユーリウス・カイサル (Julius Caesar, 100—44 B. C.) の偉業を繼ぎ、その歿後の紛亂を平定したオクターウイアーヌス (Octavianus) は、既に長く共和政治の誇りに慣れて來た羅馬の民心を洞察して、自らは國王 (レークス) (Rex) とか獨裁官 (ディクタートル) (Dictator) とかの稱號を避けて、唯軍の總帥たるイムペラートル (Imperator) の名のみを用ひてゐたが、上下の信望と全政權とは事實上その手に獨占せられ、元老院は從來神々に對してのみ獻ぜられた尊嚴者 (アウグスツス) (Augustus) の尊號を彼に奉つた。これより羅馬は、外形上共和政體を繼續しながら、實質的には帝政となり、西羅馬帝國の滅亡まで約五百年間、史家の所謂羅馬帝政時代(31B.C.—476 A. D.)を現出するに至つたのである。

アウグスツスの治世は(31B.C.—14A. D.)アテナイのペリクレス時代に比すべき羅馬黃金期であつて、これまで外戰內亂に費された國民の關心と精力とは、今や平和生活の醇化と向上とに向けられ、文運競ひ起つて、羅馬文化をその頂點にまで導いた。アウグスツス自らは、その腹臣の將相マイケーナース (Maecenas) と共に、大いに文藝を保護勸奬し、詩人ウェルギリウス (P. Vergilius Maro)・ホラーチウス (Q. Horatius)・オウィディウス (P. Ovidius Naso)・史家リーウィウス (T. Livius Patavinus) 等は何れもこの時期に輩出した。蓋し共和政治の實質的滅亡を慨く人士はその鬱憤を文藝に於て晴さんとし、一方アウグスツス帝はそれが自己への反感を轉

向せしめるに便利であることを知つて、益々文運を促進したのである。帝はまた當時漸く勃興しつゝあつた圖書蒐集の熱に乘じて、オクタウィア圖書館（Porticus Octaviae にあり）及びパラーチーナ圖書館（Palatinus の寺院にあり）を建設した。更に又帝は首都羅馬の美化に盡力し、寺院や劇場や浴場をば、世界に跨がる大版圖の各地より集めたる大理石や黃金を以て眩ゆきばかりに美裝せしめた。かくて「その承けたる瓦の羅馬を大理石の都市として遺した」といふ帝の豪語は決して單なる豪語ではなく、又セネカが世界を一家の如くに考へる當代の人々の感懷を述べ、プルタルコスが羅馬をば世界を平和の港に繫ぐ錨と名づけたのも至當の表現であつた。

國風の頽廢と教育の大勢　アウグスツス以後約二百年間は、所謂五賢帝卽ちネルウァ（Nerva, R. 96—99）トラヤヌス（Trajanus, R. 98—117）ハドリヤヌス（Hadrianus, R. 117—138）、アントニウス・ピウス（Antonius Pius, R. 138—161）、マルクス・アウレリウス（Marcus Aurelius, R. 161—180）の如き名君が相繼ぎ、外征に內治に偉績を擧げて、羅馬帝政の極盛期を示した。而もまた沒落の素因はこの極盛の蔭に醸されつゝあつたのである。卽ち既にして敵國・外患なき强大なる國內には享樂・奢侈・殘忍の風潮が滔々として流れ充ちた。そこでは家庭教育が先づ頽廢して、不品行・自由結婚・離婚が一般に行はれ、父母の惡感化は子女の童心を汚損し、童僕及び家庭教師は阿諛・利慾のみを念として教育の誠心熱意を缺き、かくて羅馬的なる情意の陶冶に久しき地盤となり來れる家庭教育がつひに崩壞したのである。更に社會の大衆は低劣なる快樂に陶醉し、猛獸や劍客の爭鬪殺戮が日夜觀衆を狂喜させ、厖大なる版圖に信仰は雜然と入亂れ、世界を家とする人々に個人主義的傾向は益々浸潤して、社會は今や往年の堅實なる教育的機能を全く失墜した。この間にあつて唯學校教育のみは歷代帝王の積極的保護

勸奬により頗る發達したけれども、それさへも知育を主とせるものであつて、この主知的傾向が偶々衰へ行く國運を反映してゐたのである。かくの如きは國風の大勢であると同時に國民教育そのものゝ大勢であつて、吾々は次にこの教育的趨勢をば、家庭教育、社會教育及び學校教育の各方面に亙つて稍々詳細に敍述しなければならぬ。

家庭教育の頽廢　帝政時代の道德的頽廢は先づ家庭生活の破壞に於て現はれた。そして家庭の中心たる母親達は往時のマートローナ（matrona）の威嚴を棄てゝ今や家政と育兒とを奴隸の手に放任し、自らは美粧と興行見物と戀愛とに熱中した。古來の嚴肅な宗教的結婚式（Confarreatio）は稀になつて、自由結婚が普く行はれ、不義と離婚とは日常の茶飯事となつてしまつた。中には二十度も結婚した婦人があつたと傳へられてゐる。勿論婦人の墮落は反面に於て男子の墮落をも意味するものであり、兩親のかゝる頽廢的生活が子女に與へた惡感化に就ては殆んど想像に餘りあるであらう。更に又童僕及び家庭教師の腐敗も子女の童心を汚損する主要原因であつた。彼等は唯報酬のみを念頭に置いて、子供にも主人にも甘言と阿諛と卑屈とを以て仕へ、純眞なる好學心と眞摯なる教育熱とは彼等の態度の何處にも見出されなかつたのである。

社會風敎の頽廢　帝政時代の羅馬社會の墮落を證明する第一の事象は流血の慘事に狂喜する殘忍の風潮であつた。羅馬人に取つては、人間が或は人間と戰ひ或は猛獸と鬪つて死んで行くのを觀ることが最大の快樂であつたのである。アウグスツス帝の時旣に劍客（gladiator）の鬪技が流行し、帝は一日に百二十人以上の人間が相鬪ふことを禁止したが、それも無效であり、トラヤヌス帝は一萬人の奴隸を鬪技場に上らしめた。猛獸を相手とする鬪技にも、ポンペイウスの時旣に六百頭の獅子が、アウグスツス帝の時四百二十頭の豹、二十頭の象が使用せられ、

チトゥス（Titus）帝は一日に五千頭の猛獸を殺した。而も觀客は人間よりも猛獸の方に聲援し、人間の流血を最も好んだ。貧しい男が闘士の鮮やかな一擊の下に殺され、その屍體が運び去られて行くのを觀衆は亂舞して見送り、又死に瀕して生命を乞うてゐる男に對し、觀客席の一婦人は寶石に飾られた腕を差し伸ばして、その乞を拒絶し、彼殺さるべきことを命じた。時には又三十隻の船を海上に戰はせて觀衆がこれを狂喜し、その戰の愈々激しくその犧牲の愈々多數なるに從つて大衆は益々陶醉したのである。

かくの如き殘忍なる享樂と結合して奢侈浪費の風潮が昂じて行つた。例へば辯論家ホルテンシウス（Q. Hortensius Hortalus, 114—50 B.C.）はその庭の樹木に葡萄酒を注がせ、皇帝ウィテルリウス（Vitellius, R. 69 A.D.）は毎日四回の大饗宴を催し、而もその第二回目以後は（當時の風習に從つて）嘔吐劑をも用意して置いた。

更に帝政時代の宗教も決して健全なものではなく、世界を併呑した大帝國は渾沌雜然たる信仰をも併せ取らねばならなかつた。かくて羅馬在來の國民的信仰の外に希臘の神々を始めとして、埃及のイーシス（Isis）・セラーピス（Serapis）、フェニキアのバール（Baal）・アスタルテ（Astarte）、波斯のミトラス（Mithras）、猶太のエホバ（Jehova）等の諸神が信仰せられ、皇帝セウェルス（Aurelius Alexander Severus, R. 222—284）の如きは、自邸の禮拜堂にあらゆる宗教の開祖を合祀し從つて例へば、希臘の神オルプェウス（Orpheus）やプュタゴラス派の哲人アポローニオス（Apollonios Tynaios）がアブラハム（Abraham）や基督と共に祀られるといふ奇觀を現出した。かゝる信仰の混亂時代にあつて、有識階級の人士は、或はそれ等の統一的把握に惱み、或は端的に信仰一般に背を向け、無智の民衆は信仰の矛盾をも意に介せず、迷信との區別をも顧慮することなく、唯自己に好都合なる考

へ方に於て雜然たる信仰をその儘に受容れた。この淺薄安逸なる態度が堅實なる道德生活の保障となり得ざることは自明であつて、羅馬の信仰の混亂はそのまゝ國風の頽廢の結果でもあり原因でもあつたのである。

圖書館の發達　以上の如き家庭教育の破壞、社會風教の頽廢によつて情意の陶冶が衰へ行くことに反比例して、人々は知識による救濟を求め、知育のみは異常の進展を齎らした。その現れとして先づ見るべきは圖書館の發達である。既にカイサル及びアウグスツスの親友たりしアシニウス・ポルリオ（C. Asinius Pollio）は、カイサルの意圖を承けて、アェウンチーヌス（Aventinus）丘上なる自由の女神リーベルタス（Libertas）の社殿に圖書館を創設し、希臘及び羅甸の文獻を蒐集した。既述のアウグスツスのオクタウィア及びパラーチーナ兩圖書館はこの例に倣へるものである。更にトラヤヌス帝はウルピア（Ulpia）圖書館を、コンスタンチーヌス大帝（Constantinus, R. 306—337）はユーリア（Julia）圖書館を建立し、紀元第四世紀には羅馬市内だけでも二十八の公立圖書館が出來た。これ等は一面歷代皇帝の好學心に因ると共に、又政策的意味も含まつてゐた。それほど國民一般の知識欲は增進し、私人も有產者は圖書館を設けて自己の氣品を誇る風があつた。かくて圖書館は、宮殿に於ても別莊に於ても浴場に於ても、その主なる裝飾施設となつたのである。

教育制度の發達　國民知育の勃興は教育機關の設備改善と教師の地位の向上とを促し、歷代の帝王はこの點に關しても亦積極的に盡力した。即ち先づウェスパシアーヌス（Vespasianus, R. 69—79）帝が教師の生活條件の改善に意を用ひ、羅甸語及び希臘語の修辭學校教師に對し年々國庫補助金を給した。又トラヤヌス帝は貧兒の教育に留意し、且つ屬領に於ける學校教育の發達に盡力した。ハドリアヌス帝は自らも學者であつたが、アテナイウム

(Athenaeum) といふ高等程度の學園をば、ユピテルの社殿カピトーリウム (Capitolium) に起し、修辭學者や詩人をして其處に講演教授せしめた。そして任を終へた老學者には恩給を與へ租稅を免除した。次でアントニウス・ピウス帝もアウディトリア (Auditoria) と稱する宮廷學校を建てゝ子弟の教育を圖り、又全國の修辭教師及び哲學教師に恩給と名譽の地位とを與へた。マルクス・アウレリウス帝も亦當時國庫の窮乏にも拘らず、アテナイの哲學學校の教師並びに修辭學校教師に對する恩給を定めた。アレクサンデル・セウェルス (Aurelius Alexander Severus, R. 222—234) 帝は更に羅馬に修辭學・文法・醫學・數學・機械學・建築學の寄附講座を新設し、且つ貧學生に對する奬學費を規定した。ディオクレチアーヌス (Diocletianus, R. 284—305) 帝は三〇一年の布告により全國教員の俸給を統制して授業料の昂騰を防止した。つひにコンスタンチーヌス大帝は、從前より行はれてゐた教員の特權、卽ち公役免除・裁判特例・國庫給受領の三特權を確立するに至つた。

教師の資格檢定制度も亦右の諸制度と並行して發達した。卽ち從來は前任者が後任者を推擧することに一任してあつたのを、マルクス・アウレリウス帝の時初めて最も卓越せる人々より成れる檢定委員會に於て教師候補者を嚴重に試驗することゝなつた。然るにこの制度もやがて衰へて教師の資質が低下したので、ユリアーヌス (Julianus, R. 361—363) 帝は再び教員檢定制度を布告した。その檢定規定によれば「教師たるべきものは、先づその品性に於て、第二にその辯舌に於て、卓越してゐなければならぬ。自分は自ら各町村に出張して親しく各人に接する事能はざるが故に玆に令して告げるのであるが、教鞭を執らんとする者は輕卒にこの職に身を委ねることなく、官廳 (ordo) の認可を受け、第一流の人々の委員會 (curiales optimi) の承認を經ることを要する。」これを以て見ても、教師の資質の吟味を重要視した當時の教育的關心を覗ひ得るのである。

初等教育及び中等教育　初等學校の內容は共和時代と同じく讀み書き及び計算であつた。希臘語の教科書として『學習會話』(Colloquia Scholastica) があり、教師又は優等生がこれを範讀し他の生徒がそれに倣つて讀んだものと思はれる。又速記 (tachygraphia) も帝政時代には普く行はれ、そのために特別の「速記者」(notarius) に就て學んだ。中等學校の內容は共和時代よりも遙かに廣汎になつた。クィンチリアーヌスによれば、中等教師たる「文法教師」の職分は、先づ「正しく話すことの知能」(recte loquendi scientia) と「詩の解說」(poetarum enarratio) とを授け、次に各種の普通學科を教へることであつた。教材として最も多く用ひられたのはホメロスの詩で、それはすべての解釋及び批評の出發點であり、文法の基礎であり、學校生活そのものゝ諸方面もそれに結合して說かれた。ホメロスに次いではウェルギリウスの作品が用ひられ、キケロの作品も亦行はれた。補助學科として神話が教へられる事も益々盛になり、それはやがて歷史教授の前階でもあつた。卽ちストラボ (Strabo, 54 B.C.—24 A.D.) の言へる如く年少兒童は神話によつて好奇心、知識欲を開發せしめられ、長じては現實の物語 (歷史) を學ぶのが至當とせられたのである。而して神話の教科書としてヒーギーヌス (C. Julius Hyginus, 64 B.D.) の作と傳へられてゐる『物語本』(Fabularum Liber) が廣く行はれ、歷史の教科書としては希臘の學者デキシッポス (Herennius Dexippns, c. 210—273) の史書が多く用ひられた。ハドリアヌス帝の時フロールス (Florus) が、羅馬建國よりアウグスツスに至る迄の羅馬史を書いたが、その簡潔さと修辭の巧みさとによつて、中世期に至るまでも愛讀せられた。又東羅馬帝國のウァレンス (Valens, R. 314—378) 帝の治下に於てエウトロピ

ウス（Eutropius）が、羅馬建國よりウァレンス帝に至るまでの羅馬史綱要を十卷に著述したものは最も多く使用せられた。更に史實の記憶に便するため詩の形に叙述することも行はれ、詩人アウソニウス（Ausonius, c. 310—390）がヒラガバルス（Elagabalus, R. 218—222）帝に至るまでの歴代帝王の歴史を六脚韻の詩に詠じたのはこのためであつた。尙地理教授に於ては、第三世紀の地理學者ソリーヌス（C. Julius Solinus）の著作『事物備忘錄』（Collectanea Rerum Memorabilium）が最も多く用ひられた。

教授方法に關して先づ注目すべきは、教科書の普及の未だ充分ならざりし時代に於て、教師が自ら「筆記」（dictata）を作り、これを生徒に暗誦せしめることである。次に直觀教授の重要性も既に知られ、神話や歴史地理の內容を繪畫に示すことが行はれた。ホメロスの詩の教授にテオドーロス（Theodoros）の『イリアの圖繪』（Tabula Iliaca）が用ひられ、歴史書に戰爭の圖とそれを說明する希臘文字とが並べ記されてゐたことの如きは、その例である。地理教授に地圖を用ひることも行はれ既にアグリッパ（M. Vipsanius Agrippa, 63—12 B.C.）が世界地圖の作製を準備し、アウグスツスがこれを完成せしめたが、この大地圖に倣つて、學校用の部分的地圖が多數に作られた。羅馬帝國內の各屬領の自然及び人事を記した『旅行地圖』（Itinerarium Pictum）も行はれた。

教養階級の資格としての希臘語の重要性は帝政時代に入つて益々加はり、クィンチリアーヌスの如きは、後述の如く、羅甸語に先立つて希臘語を教授すべきことを說いた。この希臘語及び羅甸語の教科としての文法（grammatica）の外に音樂（musica）・幾何（geometria）・算術（arithmetica）・天文（astronomia）・修辭學（rhetorica）・辨證法（dialectica）を加へた七科が所謂「七自由科」（septem artes liberales）として、高等教育の豫備課程たる

中等教科に確立したのもこの時代である。

因に當時の羅甸文法書にして後世長く行はれたものは、羅馬のドナーツス（Donatus, c. 355）の文法書三卷（Ars Grāmatica tribus libris comprehensa）と、コンスタンチノープルのプリスキアーヌス（Priscianus, 6th cent. A.D.）の文法書十八卷（Commentariorum Libri XVIII.）とである。

高等教育　七自由科による豫備的教養を獲得せる者は進んで高等教育を受けたのであるが、將來政界に活躍せんとする青年は先づ修辭學校に學んだ。修辭學校の教授は理論的及び實際的の兩面に分れてゐた。理論的方面に於ては、修辭教師が或は教科書により或は講義筆記によつて雄辯術の理論を講述した。そして講述內容は希臘並びに羅馬の有名なる詩人・歴史家・哲學者・辯論家等の作品に結合して行はれた。次に實際的方面に於ては、先づ文筆による表現を練習させ、その題材も初めは傳說・物語（例へばロームルスが狼に哺乳させられた話など）に就てそれの反駁（anaskene）と證明（kataskene）とを行はしめ、やがて偉人を讃嘆し低劣なる人物を非難する論文や、人物の比較論評を試みさせた。更に多數の學生が德や不德の「共通の題目」（loci communes）に就て論述することが行はれ、最後に個々の具體的問題（例へば都會と田舍と何れが住みよきか、軍人と法律家と何れが好ましきか等）に關する論文が練習せられた。次に口述の演習も易より難に漸進的に課せられ、初めは或る事件に關して人を諫止し若くは勸奬するための「說得演說」（declamationes suasoriae）が練習させられ、更に或る事件に關する彈劾及び辯護の「論爭」（controversiae）が修練させられた。而して辯論術の最高の段階は「卽席に演說すること」（extempore dicere）であつた。是等各種の演說は學生に行はせると共に、教師自らも實演して模範を

示したのである。

修辭學校は併しながら、一面には時代精神の墮落と共に辯論の形式のみが尊重されて內容が閑却せられたことにより、他面には功利名聲を目的として諸國を遍歷するソフィステス的辯論家の橫行によつて、紀元第二三世紀頃より次第に墮落して行つた。

修辭學校の課程を修了したる者は更に哲學學校で學んだ。その敎科目は論理學(logica)・辨證法(dialectica)・數學(mathematica)・物理學(physica)等を含んでゐたが、就中主要なるは倫理學(ethica)であり、そしてストア學派の思想が最も優勢であつた。併し概して帝政時代の哲學には何等の獨創はなく、折衷的通俗哲學の特色を帶びてゐた。プラトンの傳統を繼げるアカデメイア學派も、アリストテレスの衣鉢を承けたる逍遙學派も傳承的古典の註解傳達以外には何等の新機軸も出さなかつた。但し哲學學校及び哲學者に對する外的條件は、歷代帝王の保護政策と有志者の好意とによつて大いに惠まれてゐた。即ち學校や講座が增設寄附されたものが多く、個人としても優遇された學者が少くなかつた。アウグスツス帝に於けるアテーノドーロス(Athenodoros)、チトゥス帝に於けるムーソーニウス(Musonius)、ネルウァ帝及びトラヤヌス帝に於けるディオ・クリソストムス(Dio Chrysostomus)、マルクス・アウレリウス帝に於けるルスチクス(Q. Junius Rusticus)、チベリウス帝に於けるトラシロス(Thrasylos)等はその例である。

修辭學や哲學が希臘よりの輸入傳承に過ぎなかつたのに對して、法律學だけは羅馬人の天才によつて獨自の發展を遂げた。共和時代には法律學は修辭學よりも地位が低く政治や裁判に就ての有力な活躍者は辯論家であつた

が、帝政時代に入つてはその位置を顚倒して法律家が辯論家の上に立ち法律學の專門的修養は今や有爲の人物の必須の資格となつて來た。こゝに學としての法律學の發達が促されたのである。アウグスツス帝の下に、アンチスチウス・ラベオ(M. Antistius Labeo)は公法及び私法に關し、アテイウス・カピト(C. Ateius Capito)は私法に關して、夫々權威となつてその發達に貢獻し、この兩權威はやがて羅馬に法律の二大學派を起らしめた。即ちカピトの學派は既往の法律・判例に忠實なる歷史派となり、ラベオの學派は法律の一般概念に從つて現存の法律の進步を圖る純理派となつた。かくして法律學者は立法司法行政上の重要職分を以て國事に參劃することゝなり、且つ彼等の間に法律の整理編纂の事、法律の敎育を後輩に施す事が行はれるに至つた。ハドリアヌス帝の治下に於て、サルウィウス・ユリアヌス(Salvius Julianus)が試みた『法令集』(Edictum Perpetuum)は法律整理の一例である。法律敎育は普通の自由科は勿論、歷史及び哲學の素養をも必須の前提としてその上に行はれ、その敎授方法は一般向の講義と狹き範圍の學生に對する體系的敎授とに分けて行はれた。一般向の講義は特に興味ある法律問題を取扱ふこと(questiones tractare)を主とし、體系的敎授は指定の敎科書に就ての講述及び討論から成つてゐた。この場合の敎科書としては、入門的講義たる『通論』(Institutiones)、法律問題を中心にして述べられたる『問題書』(Quessiones)、各種の法律學說を分類し系統づけたる『體系書』(Digesta)等があり、ガーイウス(Gaius, 110—180)の『通論』の如きは就中有名なものであつた。後に東羅馬帝國のユスチニアヌス(Justinianus, R. 527—567)帝が、トリボニアヌス(Tribonianus)以下十六人の法學者を委員とし六年の歲月を費して完成せる羅馬法四部卽ち(一)古來の法規中現に效力を有するものを集めたる Codex. (二)大法律家の著書を

拔萃せる Pandecta.（三）初學者のための法律通論たる Institutiones（四）帝の代に新に發布せられたる新法律集 Novelles は實に上述の如き法律學及び法律教育勃興の成果であり、これこそは羅馬國民最大の文化的業績となつたのである。

因みに醫學は羅馬に於てはその地位極めて低く、トラレス（Tralles）の人テッサルス（Thessalus, c. 54 A. D.）が僅か半年にして醫學を修了し、程度の最も低い弟子を集めてそれを教授してゐた例を見ても、當時の醫學の學的地位を覗ふことが出來る。ガレーヌス（Galenus, 130—200）に至つて醫學は大いに進歩し擡頭せられ、その影響は頗る廣かつたが、それでもなほ醫學を專門とする高等程度の學校はつひに設立せられなかつた。

帝政時代の學術の中心地は羅馬・アテナイ・コンスタンチノープルが主であつたが、その他アフリカ・小亞細亞・歐羅巴の各地に學術の淵叢が傳播した。高等教育の學校として特に主要なる地位にあつたのは、羅馬及びアテナイの大學であつて、各地からの學生がそこに雲集し、それ等の學生に就ては、鄕國を離れる時の手續、在學地に於ける宿所、日常の起居動作等に亙つて詳細嚴格なる規定が作られるに至つた。

要するに帝政時代の教育は、家庭教育と社會教育との頽廢の中に獨り學校教育のみが、而も知育を偏重せる內容に於て、大いに發達した。これは實に崩れ行く世相の反映として、又衰へ行く國家の表徵として、屢々歷史に繰返される事象である。かゝる教育事實に對して、然らば當時の思想家達は如何なる反省批判を向けたであらうか。これが即ち次節に述べんとする帝政時代の教育思想である。

第二節　帝政時代の教育思想

一　セネカ

その生涯　ルキウス・アンナイウス・セネカ（Lucius Annaeus Seneca）は前四年頃西班牙南部のコルドゥバ（Corduba）に生れた。父のマルクス・アンナイウス・セネカ（Marcus A. S）は知名の辯論家であつた。幼きセネカは兩親に伴はれて羅馬に移り、蒲柳の身體にも拘らず熱心に辯論術及び哲學を修め、特にストア派の哲學に强く影響せられた。長じて辯護士となり大いに聲名を博した。クラウディウス一世（Claudius I, R. 41—54）の治世第一年に、セネカはコルシカ（Corsica）に追放せられた。それは彼が帝の姪なるユーリア（Julia）と親しくしてゐたのを、皇后メッサリナ（Messallina）が嫉妬したからである。併し八年の後帝の他の姪なるアグリピーナ（Agrippina）が皇后となるに及んで、セネカは再び召還せられ、長官（Praetor）の職に擧げられ、又皇后の先夫の子なるドミチウス（Domitius）——後のネロ（Nero）皇帝——の師傅として優遇せられた。紀元後五四年クラディウス帝が歿してネロ帝が即位するや、セネカは帝の不德の性行を抑制することに貢獻したと共に、他面また自己の地位を利用して莫大なる富を致した。併しネロ帝は母アグリッピーナを殺して（この事にはセネカも加擔し且つこれを支持し是認する書翰を草して元老院に提供せしめてゐる）後益々亂行に陷り、やがてセネカの存在を厭ひ、その富力を羨望した。彼の庭園や別邸は帝のそれを凌ぎ、彼の雄辯は帝を壓倒し、彼が帝の乘馬や歌の不器用を嘲罵したことは帝の大なる反感を誘發した。帝に媚びる側近者達はつひに帝に奬めてセネカを斥けんことを圖つた。セネカは身の危險を感じ、自ら引退を乞ひ、その全財產を帝に獻ぜんことを申出た。帝は併し流石に過去の恩義に心を責められ、財產の提供をば却下し、愛護と尊敬とを裝つて、セネカを引退せしめた。セネカは爾來簡素寂寥の生活を送り、病を口實として（事實また喘息を患つてゐたが）羅馬にも殆んど出ることなく、專ら研學に身を委ねた。然るに六五年のピーソ（C. Piso）の陰

謀は、ネロ帝にセネカ處刑の口實を與へた。卽ちこの除謀に對するセネカの關與は頗る不明であつたにも拘らず、帝は護民官の一人を遣はして死を宣告せしめた。セネカは妻や友人達の同情の涙に包まれながら、哲人らしき從容たる態度を以て、腕と脚との動脈を切開して、こゝに七十年の生涯を自ら斷つたのである。

セネカはアウグスツス時代以後の羅馬に於ける第一の思想家・文筆家であり、その豐富なる內容と穩健なる見識とは、所謂『道德書簡集』(Epistulae Morales) 百二十四篇に收められゐる。彼の敎育思想も亦この中から取出し得るのである。

敎育思想　セネカの根本思想は、理性による感性の支配に德と幸福との本質を見出す所のストア哲學に據つてゐる。彼によれば人間の理性は神性の顯現であり、神的精神の一部であり、神が人の身に宿れるものである。人はこの神への近似性の故に、地上の生活から高く向上し得るのであり、又まさにこの點に各人の尊嚴が認められるのである。併しながら理性に對立して、人にはまた反理性的衝動としての感性が働き、この感性との爭鬪にこそ最大の道德的課題が存する。而もセネカによれば、單に感性の抑制といふが如き緩漫なる程度によつてではなく寧ろ感性の根絕によつてのみ、人は眞の德と幸德とに到ることが出來る。哲學は實にこの爭鬪の指導者である。自己の罪過と鬪はんがためには先づ罪過を知らねばならぬ。故に彼は「罪過を知るは幸福の始である」(Initium est salutis notitia peccati) といふエピクロスの言葉を引用して、これは實に至當の言であるとし、自己の罪過に對する認識と苛責とよりして、德への憧憬を生じ、幸福に導かるべきことを說いてゐる。而してそれをなさしめるのが哲學であつて、「哲學（といふ藥）は、（精神の）健康に有效であると同時に又甘美なるものである」(Philosophia partiter et salutaris et duleis est.)。

かゝる見地はまたセネカをして人間一般に對する普遍的なる愛の敎說を抱かしめた。階級貧富に拘らず、すべての人々を愛し、その人間性を尊敬し、その罪過を憐むべきことは、セネカの道德論の最も輝かしき頂點であり彼が基督敎義に影響せられたとの附會說の行はれたのも、恐らくはかゝる基督敎的敎說に由來するのであらう。

上述の根本思想はやがてセネカの敎育本質觀を規定してゐる。彼によれば敎育は、情欲の克服によつて理性の支配を促進し道德生活に貢獻する限りに於てのみ價値を有する。而して人間は本性上惡に傾いてゐるが故に、この意味の敎育は愈々必要である。人は精神に病を以てこの世に生れ、敎育者はこの病を治する醫者である。「何人に對しても善き心が惡き心に先立つて現れることはない。」(ad neminem ante bona mens venit quam mala) 而も「德は決して敎へられ得ざるものではなく」(non dediscitur virtus)、「一たび吾々に善が植ゑられるや、それは永久の所有となる。」(semel traditi nobis boni perpetua possessio est.) 故に敎育者は、宛も病弱の身に對する醫者の如く、先づ出來るだけ優しき言葉を以て子弟の心情を治療し、忠告によつて德に向はしめ不德から離れしめねばならぬ。然る後に漸次に、嚴格なる訓誡・叱責・懲罰に訴ふべきである。賢き懲罰は外科醫の器具の如く、吾人を益せんがために吾人を苦しめるものである。

セネカは又子弟の個性に適應せる敎育方法を主張し、練習による習慣の養成を高調し、特に理論的敎說よりも具體的示範を尊重した。「敎說による途は長く、模範による途は短く且つ有效である。」(Longum iter est praecepta, breve et efficax per exempla) 彼は尙當時の敎育者が徒らに外面的・非實用的なる知的敎授に偏し、博學者、衒學者をつくりつゝあるのを慨嘆して、「吾人は生活のためにではなくて學校のために學んでゐるのである。」(Non

vitae sed scholae discimus）と非難し、これより後「學校のためにではなくて生活のために學ばれねばならぬ。（Non scholae sed vitae discendum）といふことが、生活に役立つことを目的とする教授の標語となつた。セネカはかく教授に於ても道德教育を終局の目的として謂はゞ「教育的教授」ともいふべき主張を唱へ、この見地より教科目をも考へ、德への知見を得るための哲學と、神の攝理を知るための自然研究とを有益なる教科として推奬した。彼はまた多藝・散漫を戒め、醫者を度々變へては傷は癒え難く、植物を屢々移しては强壯に育て得ないと說き、更に書籍の多過ぎることも精神を害ふものとして、權威ある少數の書籍を充分に精讀すべきことを勸めた。最後になほ、セネカは教師に對する忘恩を强く戒めた。彼によればすぐれたる知識、高貴なる教養を吾人に與へてくれる教師の價値は、吾人がそれに對して支拂ふ報酬よりも遙かに高價であつて、吾人は教師の骨折には報い得てもその教へる內容には報いることが出來ず、教師の勞働には報酬を支拂ひ得てもその貢獻に對しては支拂ふことが出來ない。故に吾人は教師をば、親しき友や愛する眷屬と共に、永く尊敬しなければ らない。セネカは師弟の情誼をかくも貴く美しく考へてゐたにも拘らず、曾ての門弟たりしネロ皇帝から、恩に報ゆるに仇を以てする非道の仕打を受けた。彼の教說はこの皮肉なる運命を通じて愈々痛烈に感ぜられるのである。

二　クィンチリアーヌス

その生涯　マルクス・ファビウス・クィンチリアーヌス（Marcus Fabius Quintilianus）は、紀元後三五年頃西班牙のカラグリス（Calagurris）に生れた。父は羅馬で活躍した可なり知名の修辭學者であつた。故にクィンチリアーヌスが若い頃から教育

のために羅馬に送られたことも驚くに當らぬ。彼の師の中には有名な文法教師レムミウス・パライモン（Remmius Palaemon）や、劣らず名のあつた修辭學者ドミチウス・アフェル（Domitius Afer）が居た。彼は自分の教育が終ると故國へ歸つて修辭學を教へたものと思はれる。といふのは、やがて彼は六八年に西班牙の一州たるヒスパニア タラコネシス（Hispania Tarraconesis）の知事ガルバ（Galba）に連れられて羅馬に出て來たからである。羅馬に於ける彼は純粹の公立修辭學校教師として拔群の成功を遂げ、彼の門下には、小プリーニウス（Caius Plinius Secundus）や、皇帝ドミチアーヌス（Domitianus, R. 81—96）の姉ドミチルラ（Domitilla）の二人の孫等があつた。彼はこの皇帝によつて勳章を授けられ、又「執政官相當官」（Consularia ornamenta）の稱號を賜はつた。又さきにウェスパシアーヌス帝によつて起された國庫俸給を最初に受領したのも彼であつた。法廷に於て辯護士として成功した證跡も彼の著作の中に一再ならず發見せられる。二十年間の教職生活は彼に羅馬第一の修辭學教師の光耀を與へたけれども、家庭の彼は早くから不遇であつた。卽ち彼の妻は僅か十九歲の時二兒を遺して歿した。又二兒の中次男は五歲にして歿し、唯一の望をかけてゐた長男すらも十歲にして歿したのである。かくて晩年の彼は漸く憂愁に堪へずして公職を退き、著述に從事しつゝ、紀元第一世紀の終頃に歿した。

彼の著述には『（羅馬）辯論術衰頹の原因』（De Causis Corruptae Eloquentiae）、『辯論教授論』（Institutio Oratoria）及び妻を殺して告發されたナイウィウス・アルピニアーヌス（Naevius Arpinianus）の辯護論がある。この中最も主要なるは『辯論教授論』である。

辯論教授論の價値とその構成　クィンチリアーヌスの大著『辯論教授論』（Institutio Oratoria）は辯論家（orator）の養成を論じたもので、彼が二十年間の體驗を二箇年餘りの述作によつて大成したものである。彼の自覺によれば、既に希臘及び羅馬の先輩達がこの問題に就て多くの著述を遺してゐるのに、更に格別の獨創なき新著を企てることは大いに躊躇したのであるが、而も友人達の勸說もだし難く、且つ又希臘羅馬の先輩は、辯論家養成の事

をば、基礎的教養を積める者の上になさるべき領域として、その華やかなる上層建築のみを論究したのに對し、彼は人目を惹かざる基礎工事が充分に築かれなければならぬとの見地から、將來の辯論家をばその幼時より論述したのである。

更にクィンチリアーヌスによれば、「完全なる辯論家」(orotor perfectus) は同時に「善き人」(vir bonus) でなければならず、從つて單に辯論上の特殊な才能に優れてゐるだけでなく、人間として、私的生活にも、公的活動にも、あらゆる美點を有する者でなければならぬ。換言すれば從來哲學の領域として考究された倫理學上の諸德や諸々の知識は辯論家の智德として玆に論ぜらるべきであり、キケロが既に明示せる如く、哲學と修辭學とは理論的にも實踐的にも結合せらるべく、すぐれたる人は同時に哲人と辯論家との兩性質を兼備すべきである。

クィンチリアーヌスの辯論家養成論は、上述の見地よりして、教育過程としては幼時の基礎的陶冶より所謂辯論術の最高段階までを貫き、その內容としては當時の學藝の殆んど全領域を含めるものであつて、恰も希臘に於けるプラトン教育論の如く、玆では羅馬に於ける最も體系的なる教育論が建設せられたのである。彼はかゝる根本的立場を闡明せる「序說」(Prooemium) に於て、同時に全體の構成を次の如くに豫示してゐる。即ち第一卷は修辭學教師の手に移される前の基礎教育を論じ、第二卷は修辭學校の基礎的課程及び辯論術の本質を取扱ふ。第三卷より第七卷までは題材の發見 (Inventio) と構想 (Dispositio) とを問題とし、第八卷より第十一卷までは演示法 (Elocutio) そのものを述べ、その中に記憶法 (Memoria) と表現法 (Pronuntiatio) とを含ませる。最後に第十二卷は完全なる辯論家の具ふべき諸條件を總括する。

右の十二卷中第二卷以後の論述は當時の辯論術そのものゝ特殊條件に制約せられて必ずしも永遠的意義を有し得ないのであるが、第一卷の基礎的教育論は、普く教育論一般の諸契機を含み、今日なほ傾聽に値する內容である。故に本講に於ては主としてこの第一卷の要旨を敍述したいと思ふ。

家庭教育　先づ父はその子供に就て教育の可能性を確信し前途の希望を抱かねばならぬ。少數の例外を除いて人は一般に豊富なる素質を以て生れるのであつて、それを達成しないのは必要な注意を怠るがためである。勿論素質の優劣は人々によつて差異があるけれども、教育から何物をも得ることがないといふ樣な人は絶對にあり得ない。かくて父は子供の誕生と同時に將來の辯論家たるべき希望をその子に囑して教育に最善の注意を拂はねばならぬ。

何よりも先づ子供の乳母 (nutrix) が品性のすぐれた人で正確な言葉を話すことが必要である。ストア哲學者クリシポス (Chrysippos) に從へば乳母は哲學者であることを理想とするけれども、せめて出來るだけ善き婦人が選ばれねばならぬ。子供が最初に耳にし最初に模倣せんとするのは乳母の言葉であり、而も最初の印象は最も深刻で、わけても惡き印象ほど執拗に殘るのである。故に後年忘れねばならない樣な言葉を嬰兒の中に慣れさせてはならぬ。

兩親に關して言へば、單に父だけでなく母もまた高き教養を有することが望ましい。—クィンチリアーヌスは玆でグラックス (C. Sempronius Gracchus) の母コルネーリア (Cornelia)、ライリア (Laelia) の父ライリウス (Laelius) 等を例示してゐる。—又不幸にして兩親が高き教養を受け得なかつたとしても、その故に子供の教育

を忘るべきではなく、却て益々注意して教育すべきである。

子供の交友に就ても乳母と同樣なことが要求せられ、更に童僕（paedagogus）は充分の教育を受けた者たることを要し、若し然らずんば、少くとも自らの無學を自覺せる者たることを要する。バビロニアのディオゲネス（Diogenes）によればアレクサンドロス大王の童僕レオニデス（Leonides）が王の幼時に教へた若干の誤謬は、大王となつた後にも除き得なかつたとのことである。

乳母・朋友及び童僕が若し上述の如き資格を具へてゐない場合には、少くとも話し方に就ての知識ある人が子供に附いてゐて、乳母・朋友・童僕等が子供の面前で誤つた言葉を使つたならば直ちにそれを訂正し子供の癖にならぬ樣にしなければならぬ。

家庭に於ける言語教授は羅甸語よりも希臘語を先に始むべきである。蓋し羅甸語は日常生活の中に自ら修得せられ且つ又羅甸語は希臘語に由來するからである。併し希臘語を始めてから間もなく羅甸語教授をも始め、やがて兩語平行して教へられるのが望ましい。

世人の多くは遠くヘシオドスの見解を傳へて、子供は七歳以前は教育の效果がなく教育に堪へ得ないから、七歳に達して始めて教育を施すべきだと考へてゐる。尤もヘシオドスがこの見解を述べてゐる『教訓』（Hypothecae）といふ教訓詩が僞作であることはアレクサンドリアの批評家アリストファネス（Aristophanes of Byzantium, 257—180 B. C.）によつて指摘せられたけれども、併しなほエラトステネース（Eratosthenes, 276—196 B.C.）その他の權威者が七歳以前の教育無效論を唱へてゐる。それにも拘らず、子供は如何なる時期にも教育から離されて

置いてはならぬといふ意見の方が遙かに賢明である。道德教育の可能なる幼兒に言語教授の不可能な筈はなく、言語修得の基礎條件たる記憶力は幼時に於て特に强いのであるから出來るだけ早く言語教授を始めた方がよい。

但し幼兒に對して强制的方法は禁物である。寧ろ興味本位で遊戯的に學ばしめねばならぬ。時には朋友との間に羨望の心や競爭心を起させて刺戟し、又褒賞を與へて激勵することが必要である。

要するに幼時の教育は頗る大切であつて、生涯の教育課程の基礎である。人々はフィリポス王がアレクサンドロスの教育をば當時の最大の哲人アリストテレースに託したことを想うて、自らの子供の教育に深甚の注意を拂はねばならぬ。（クィンチリアーヌスは尙こゝに初步の文字教授・讀方教授に就て詳論してゐるが、要するに記憶と模倣とを基礎として確實なる根柢を築くことを主眼とせる意見である。）

學校教育の長所　乳母の手から離れて益々修學に熱中する時期になると、子供を家庭で私的に教育すべきか、學校に送つて公の教師に託すべきかが問題となる。すぐれた思想家や有名な國家の國民性を形成した人々の多くは後者に贊成してゐるが、なほ私教育を奬める人々もあることは蔽ひ難い。クィンチリアーヌスはかゝる事態に面して、學校教育の長所を主張し、學校の存在理由を力說してゐる。彼によれば學校教育に反對する人々の論據は第一に道德的に最も危險な時期にある少年を大勢の中に出すことは品性陶冶の上に望ましくないこと、第二に學校に於ては教師の注意が特定の生徒に偏して普く行屆き得ないといふことに存する。クィンチリアーヌスはこれに對して、第一に道德的弊害は家庭教育にも存することを主張して、父母や童僕の非教育的態度を指摘し、第二に學校教育と雖も、良教師がその力に適するだけの人數を收容しさへすれば個別的注意も行亙り得ることを述

べ、學校一般を拒絶することゝ、優良なる學校を選擇することゝを混同してはならぬと說いてゐる。かく世論を反駁して、更に彼一流の見地より學校教育を推奬し、將來辯論家たるべき者は幼時より共同社會生活に慣れる必要があり、學校生活は生徒をして自らの力を知らしめ、永く變らぬ友情を培ひ、そこでは學友の學ぶ所を自らも學ぶことが出來、學友の受ける賞罰によつて自らも敎へられ、競爭心が（それ自身では惡德であるとしても）美德のために利用せられ、特に兒童は敎師や童僕や父母の敎へよりも學友の刺戟に動かされるものであることを指摘してゐる。

かくの如く學校敎育を支持し基礎づけてゐる所に、吾々は當代第一の公立學校敎師としてのクィンチリアーヌスの面目を想望すると共に、家庭と社會とが敎育的職能を失墜して學校敎育のみが獨り繁榮した當時の大勢を覗ふことが出來るのである。

兒童の個性とその取扱方　クィンチリアーヌスは敎師の第一の任務として、兒童各自の特殊な性質能力を知り、それに適應せる敎育を行ふべきことを力說してゐる。彼によれば兒童の優劣を知るべき主要徵表は記憶力と模倣力とであるが、これ等の能力の長短を察して適當な方策を立てねばならぬ。その他兒童の特性は或は弛緩し、或は剛情であり、或は恐怖によつて改善される者も畏縮する者もあり、或は徐々の永續的努力を可とする者も急激の集中的努力を可とする者もある。これ等の傾向を熟知して、叱責・賞讃等を適宜に行ひ、兒童の名譽心を利用するなどして、巧みに敎育せねばならぬ。併しながら兒童は休養によつて氣力を新鮮ならしめることが必要である。又遊戯は彼等の本性であり、且つ彼等の性行を如實に發露し、品性陶冶にも有效であるから大いに敎育的價

値がある。但し無制限の保養は怠惰の習慣をつけるが故に愼まねばならぬ。

最後にクィンチリアヌースによれば鞭撻の罰は有害無益である。第一にそれは餘りに醜い罰で奴隷にのみ適はしいものである。第二に叱責のみでは無效なほど低劣な者に鞭を加へても、それは益々鞭に堪へる剛情を養ふだけである。第三に敎師が完全な訓育者であるならば、かゝる罰は絕對に必要がない筈である。

かくの如き敎說の中に吾々は、古代敎育者に稀なる兒童心理への洞察とその重要視とを讃すると共に、古の羅馬の嚴格なる訓育は既に忘れられて、新希臘時代の自由主義がクィンチリアーヌスの敎育方針の中にも取容れられてゐるのを感ずるのである。

文法敎師の資格と辯論術の基礎敎科　修辭學の基礎課程としての文學的敎養を擔當する敎師は所謂「文法敎師」(Grammaticus) であるが、クィンチリアーヌはこの敎師の具ふべき資格に就て次の諸點を擧げてゐる。卽ち先づ主要資格は正しく話す力と詩を解釋する力とである。併し話すことに結合して作文の能力が必要であり、詩の解釋に先行してそれの朗讀法が必要であつて、且つこれ等何れにも批評の力が伴はねばならぬ。更に詩の外に、各方面の文藝作品を讀んで、內容と語彙とを共に豐富にすべきである。その上音樂の素養を積んで韻律のことを會得し、天文學を修め、哲學を學んで、それ等に立脚せる諸家の作品を理解し得ることが、敎師として必須の資格である。最後に雄辯そのものが辯論敎師に必要なるは言ふ迄もない。クィンチリアーヌスはその見地より、文法敎師が文法上の事項に精通せねばならぬとて、希臘語、羅甸語の發音、綴字、文法等に就て詳細なる例を擧示してゐる。

文法教師の資格として擧げられる諸點はやがてその教師によつて教へらるべき辯論基礎教科の內容を示すものである。故にクィンチリアーヌスは、辯論修養の要件としての、正確なる言語、優雅なる言語、發音法、外國語、古語、新語、語源、典據、慣用語、綴字法、朗讀法等に就て論じてゐる。又讀物としては單に辯論の見地だけでなく、道德的見地よりも選擇標準を立て、ホメロス、ウィルギリウス等を初め、悲劇、抒情詩等の作家を擧げ、他面に於て哀歌殊に色情的悲歌の類を避くべきことを說いてゐる。そして作文の材料としてもアイソプス(Aesopus)の物語を改作することを奬めてゐる。

右の文學的修養の外に、希臘人が「普通教科」(enkyklios paideia)として擧げた諸教科も亦辯論術の基礎陶冶のために推奬せられる。その主なるものは第一に音樂であつて、それによつて辯論に必要なる言葉の配置、聲の抑揚韻律表情身振等を學ぶことが出來る。但し惰弱淫猥な音樂は玆でも斥けられて、勇渾莊重なものが奬められる。第二に幾何學はそれによつて知力を練磨し論證の圖式的展開を教へる點に於て辯論術の基礎となる。第三に幾何學を天體に適用して天文學を學ぶことも、宇宙の秩序・宿命を知り、又天體の不思議を解明して恐怖を除くこと等のために、辯論家に必要な基礎的修養である。

最後にクィンチリアーヌスは舞臺俳優からも聲色・態度・身振り等の學ぶべき點の多いことを說き、又この限りに於て、體育の價値をも認めた。但し彼はかくして身振・態度を學ぶことをば、兒童期以上には亘らぬ樣に、且つ又兒童期と雖もこの事に餘りに多くの時間を費さぬ樣にと附言してゐる。

多くの教科の學習可能性　以上の如く多くの必須教科を列擧したことに就て、世上には屢々これを危ぶみ反對する

る者がある。卽ちかゝる多方面の教科を同時に課することは兒童の精神を混亂疲勞せしめるものであり、兒童の心身はかゝる負擔に堪へ得るものでもなく、時間數も不足するといふのが世人の論據である。併しこの批評は、クィンチリアーヌスによれば、人間の能力に關する充分の理解を缺くことから起るものである。人間は同時に多くの事をなし得べき敏活さと融通性とを有つてゐる。例へば琴を彈唱する人は歌曲を暗誦しつゝ、調子や抑揚にも注意を拂ひ、右手を以て特定の弦を彈き左手を以て他の弦を抑へたり弛めたりし、而も足踏を以て時間を測つてゐるのである。或は辯論家が突然辯護に立つた時の如き、一事を語りつゝある間に、次の事を考へ、而も言葉の選擇・調律・身振その他百般のことに心身を働かせてゐるのではないか。加之多くの仕事も交替して行へば氣分を新鮮にし活力を回復する。故に教科と教師とを適宜に交替して學習させれば却て多くの事を有效に學ばせ得るのである。且つ兒童が疲勞するといふ如きことは考ふべきではない。却て幼少時代ほど疲勞に堪へ得る時期はなく、又兒童は實に陶冶性、模倣性、愛容性に富み短期間に多くの事を容易に學び得るのである。

その史的地位　以上はクィンチリアーヌスの『辯論教授論』第一卷の要旨である。彼は第二卷以後に於て修辭學教師固有の領域に入り、詳細なる論議を展開させてゐるのであるが、彼の教育論の價値は既に上述の一般的基礎的教育論だけでも充分に確保せられてゐる。蓋し辯論術そのものに就ては希臘以來多くの研究が行はれて來たから、クィンチリアーヌスの浩瀚なる著述は獨創よりも寧ろ折衷と集成とに特色を有するものであらうし、又辯論家養成の事に關しても近くキケロが卓越なる論述を遺してゐるが故に、クィンチリアーヌスの功績は、既述の如く、これを教育の全段階を通じての考察に擴充し、就中その基礎的段階に於て周到なる檢討を行つた點に存す

るからである。そこでは實に二十年間の教育體驗と兒童の心理や家庭、社會の實情に關する鋭く深き洞察とが結合してゐる。而も記憶と模倣とを基礎とする多數の教科の注入的教授、學校教育の支持と讃美等、當時の羅馬教育の主知主義的、學校中心的大勢をよく反映してゐると思はれる。中世の僧庵學校や本山學校の教科目及び教授法にはクィンチリアーヌスの示せる原則を踏襲せるものが多く、又近世初期の人文主義教育も彼の影響を多分に受けてゐた。恐らく言語教授の領域に限つても、彼の所説には今日なほ傾聽すべき契機が少くないであらう。

三　プルータルコス

その生涯　プルータルコス（Ploutarchos）は紀元後五〇年頃ボイオチア州のカイローネイア（Chaironeia）市の名門の家に生れた。彼はティモクセナ（Timoxena）といふ賢婦人を妻とし四男一女を擧げたが、その中二男一女を早生せしめ、早く家を去つてアテナイに遊學した。彼が愛妻を慰めるために送つた書翰は、妻の貞淑謙讓なる面目と彼の溫情とをよく反映し後年モンテーニュ（Montaigne, 1533—1592）はこれを類似の境遇にある自分の妻に送つたと言はれてゐる。アテナイに出たプルータルコスは約二箇年もその地の大學に過し、哲學の外に修辭學 數學・醫學等をも修めたと思はれる。彼の師は埃及出身の逍遙學派の哲人アンモーニオス（Ammonios）であり、その師弟關係は長く美しき友情として續いた。修學を了へた彼は故郷カイローネイアに歸り、高官に就き又その著作によつて名聲を博した。彼は又屢々旅行し、羅馬にも三回位は行つた樣である。それは一面は政治的使節としてであつたが、他面には世界の都に於て學術を講ぜんとする動機にも基づいてゐた。彼は羅甸語を學ばなかつたと告白してゐるが、全然これを知らなかつたとは思はれない。羅馬に於ける彼は公の學校は開かなかつたがその講筵が大いに成功し、そこで羅馬の知名の人士と親交を得た。（トラヤヌス帝の教師となつたとの説もあ

るがそれは疑はしい。）彼の旅行は伊太利・埃及・小亞細亞・希臘の各地に試みられ、特にデルフォイに於ては重要な神職に就いたこともあつた。その歿したのは紀元後一二〇年頃であつたらうと思はれる。

プルータルコスの著作書として最も有名なるは所謂『英雄傳』（Bioi Parallelol）である。それは希臘及び羅馬の偉人四十六人を選び、希臘側と羅馬側とから各一人を取つて二人づゝの組を作り、比較評論的にその傳記を書いたものである。歴史的記錄といふよりも寧ろ倫理的教訓書としての面目がそこには強く現れてゐる。この『英雄傳』の姉妹篇として、倫理的教説そのものを書いたものが『倫理書』（Ethika）である。尤もこれは彼の講演の原稿を整理したものと思はれ、而もそれは他の人の手によつて成され、その意味に於て僞作といふ通説が承認せらるべきであるとしても、彼の流に於ける思想の特色を忠實に表現せるものとして、重要文獻たる價値を失はない。

根本思想　プルータルコスの教育思想の根柢は、第一に哲學と神學との結合せるものにより、第二に心理學によつて支へられてゐる。先づ彼に於ては「哲學の究極は神學」であり、兩者は不可分に結合してゐた。而してこの意味の根本思想は彼が最も多く傳承せるプラトン思根を中心としてピュタゴラス派やアリストテレースやストア派の哲學並びに神話や世俗的信仰等を融合せるものである。彼は一神教的人格的神觀に立ち、神はその創れる世界に就て合理的に配慮する理性、萬物を美しく秩序づける意志であり、神はそれ故にあらゆる善の原因であると考へた。この善の原理に對立させて彼はまた惡の原理が世界に存し、それが自然界にも人心の中にも惡を生ぜしめるとした。（この見解はプラトンが『法律』篇〔896 a〕に述べた世俗的信仰を繼承せるものであらう。）この兩原理の對立に於て併し彼は結局は神の善が優位なるものと考へ、それ故に人は結局德と敬虔とを顯現し得るものとした。この教説は後述の心理説との聯關に於て一層具體的に展開する。そして教育の仕事は實にこの超人間的

なる神の力—終局の善の顯現—に支へられ、その永遠の意圖に參劃してゐるのである。

プルータルコスはまたプラトンを承けて神と人間との中間者にダイモーンを立て、それは神意を人間に解し傳へる作用と考へた。自らデルプォイの神官となつた彼としてこの教說を抱いたことも亦當然と言はねばならぬ。

彼は上の如き根本思想を持して普く諸地方の信仰を眺め、他の諸國民の信仰も本來同一の普遍的眞理を夫々地方的形態に現したものに過ぎないと考へ、この點に於て例へば埃及の信仰も希臘の宗教と調和し且つそれに寄與する所があると考へてゐた。その廣汎なる旅行と、博學多識と、本來の穩健なる態度と折衷的傾向とが、彼をしてかゝる結論に到達せしめたことも容易に肯かれる所である。

上の哲學的・宗教的思想に關聯しつゝ、彼の教育思想に一層直接的なる基礎を與へるものはその心理說である。彼はプラトンの所說を承けて、精神をば理性と情欲との二方面より、(この情欲が更に氣概と欲望とより) 成るとした。理性は神性に連なり、情欲は肉體に根ざす。而して德と幸福とは、情欲を根絕せる「無情欲」(apatheia) に存するのではなくて、情欲を理性によつて統制せる「よき情欲」(eupatheia) に存する。更に言へば、理性は外的實在の科學的哲學的探求に向へる理論理性と人間の情欲の統制に向へる實踐理性即ち思慮とに分れるのであるが、この實踐理性が情欲の過度を制して中庸を得しめる所に「よき情欲」としての德が成立するのである。情欲が理性に統制せられて習慣となる所に人の道德的發展は存するのであるが、この習慣化は不斷の奮鬪過程によつて行はれ、德への精進を怠ることは直ちに惡への退轉である。而して若き時は肉體的精力が旺盛なるため肉體に根ざせる情欲が優つてゐるから、教育を最も必要とする時期である。老年に到るに從ひ理性の支配が優勢となる

けれども、それはなほ決して完結するものではないから、教育は生涯を通じて重要性を失はない。但し教育は被教育者をして單なる受動的地位に立たしめることなく、出來るだけ自發的に活動せしめ、結局は全き自律の人たらしむべきである。「よき教師はよき醫師の如く自らを不用ならしめることによつて、その仕事の效果を實證するのである。」

扨て上述の如き哲學・神學・心理學及び教育の根本思想に立脚してプルータルコスの教育思想そのものを更に立入つて展開するに當り、吾々は第一に身體の訓練、第二に情欲の訓練、第三に實踐理性の訓練、第四に實踐理性より理論理性への轉移、第五に理論理性の訓練といふ順序で彼の教育思想を體系的に叙述したいと思ふ。

身體の訓練　プルータルコスの體育論は、前述の根本思想に於ける中庸の德に基いて、何よりも先づ過度の飲食の警告に出發してゐる。彼はソクラテスの言葉として傳へられた信條に從つて、飢えざれば食せず渴せざれば飲まざることを奬めてゐる。そして又ティモテオス (Timotheos) がプラトーンと共に饗宴に列した翌日に、「プラトーンと食事を共にした人々は決して翌日それを後悔することがない」と言つたその言葉を常に念頭に置くべきことを說いてゐる。彼はまた夢によつて身體の內的異常を知るべきこと、常に病氣に就ての知識を得ることに心掛くべきこと、談話や朗讀は力めて高聲にすべきこと、肉食を成る可く避け、酒には適量の水を混ずべきこと等をも勸めてゐる。

プルータルコスによれば、健康は有益なる仕事への勤勉と睡眠や榮養の適度なる休養とによつて得られる。チベリウス (Tiberius) が、人は六十歲を超えても醫者に罹るのは嗤ふべきことだと言つたのは稍々過言であるが、

併し人は自らの經驗によつて自己に最適の攝生法を會得せねばならぬ。學者は研究に熱中して身體の注意を怠り勝であるが、かくてはつひに精神までも肉體と共に喪ふ外はないから、プラトーンの忠告の如く、心身を共に修練し、健康なる身體こそ活潑なる精神の基底であることを忘れぬ樣にすべきである。この心身相關の教說は、ユウェナーリス（Juvenalis c. 60—130）の「健全なる身體に於ける健全なる精神」（Mens sana in corpore sano）といふ標語によつて代表せられてゐた羅馬人一般の見解を表現してゐるだけでなく、心身兩面の調和に眞の哲人の基礎的資格を求めた希臘人的見解に基づいてゐるのである。

以上はプルータルコスの衞生論であるが、彼は體育競技に就ては僅かに言及してゐるに過ぎない。卽ち拳闘・角力・競走の價値を述べ、スパルタ人のこの點に於ける優越を讃してゐる。但し彼は職業的競技が一時的に異常の體力を示して全體としては有害であり、精神的には生涯を醉生夢死せしめることを論じて、プラトーンと共にこれを難じてゐる。

性情の訓練　プルータルコスは社交的性格の人であり、人間性情の諸相を銳敏に緻密に感知し、性情の訓練に就て多くの適切なる論策を遺してゐる。その第一は「怒の抑制」に就てである。卽ち「怒」の情の有害なるを述べ、それが習慣となり易きことを警告して、發現の初期に於て理性によつてこれを防ぐべき事を奬めてゐる。そして聲や顏色や動作に現すことによつて怒は益々昂ずるが故に、努めて沈默し、若し耐へ切れぬ場合にはその場を去り又は身を隱せと教へてゐる。彼によれば怒を言動に現はすのは婦女子や老人や病人の常であつて立派な男子のなすべき事ではない。怒を統制する修練は奴隷を不當に叱責懲罰せぬ修養によつて得られる。又餘り高價な

もの（失つて腹立たしくなる程のもの）を所有せぬこと、その接する人々を餘り高く見積らぬこと（それが低劣なるとき怒を生じ易いから）等は怒を防止するに大切な心得である。

怒に次で有害な性情は、他人の缺陷の穿鑿摘發を好む所の「好奇心」である。若し缺陷の摘發が愉快であるならば何よりも先づ自己に向つてこれを行へ。然るに人々は自己の缺點を放任して好んで他人の私的暗黑面を知りたがるのである。かゝる好奇心をば轉向させて有益なる研究、例へば自然科學や歷史に注ぐがよい。それから又他人が自分に關して何を言ふかに就ても好奇心を働かせてはならぬ。

第三に彼は「臆病」をも亦謙讓の過度なるものとして警めてゐる。心ならずも人に同意したり、保證に立つたり、不適當な人を家庭教師に雇つたりするのは皆臆病の故である。人々はこれが曾て己れに惹起した損害を想起しつゝ、やはり初期の中にこの弱點を矯正しなければならぬ。

第四に「饒舌」に關しても彼は多くの史的事例を擧げてその弊害を示し、そして理性の批判を先づ之れに加へ、然る後沈默寡言を修練すべきことを勸めてゐる。「語つて後悔したことは屢々あるが、默つてゐて後悔したことは決してない」といふシモニデスの言葉を常に想ひ起せとは彼の教へである。

第五に「富の慾望」に就ても彼はそれが飽くことなき慾望であることを具體的に說明し、その滿足が本來他人に對して相對的に得られる種類のものであつて、哲學や科學の研究が齎らす所の孤獨にしてなほ得らるべき滿足に比して低劣であることを戒めてゐる。

かくして最後に「精神の平靜」を論ずることによつて彼の性情訓練論は概括せられる。卽ち理性が情欲を統御

することによつて、人生の最も幸福なる狀態と眞の快樂とが得らるべきことを彼は力說してゐるのである。そして理性は情欲の過度を制して中庸を得しめる所にその使命を有する。「何事に於ても度を過す勿れ」といふデルプォイの神の敎こそ性情訓練の根本原則である。『妻への慰めの手紙』(Consolatio ad uxorem) に於て、娘を喪つた嘆きの妻に向ひ、「余と雖も吾等の大いなる不幸を知りもし感じもしてゐる。だが若し御身が度を超えて悲しむならば、それは娘の死にも增して余を苦しめるであらう」と言つてゐるのを見ても、彼の中庸の原則が單なる敎說ではなくて自己の實踐原理であつたことを覗ひ得るのである。そしてその精神の中庸が前述の身體の訓練に於ける中庸の原則と一貫してゐることは、彼の理論的整合をも示すものとして、尊敬に値する。

實踐理性の訓練　身體の訓練と性情の訓練とに次で、理性の訓練が問題となるのであるが、その中でも先づ自己の生活・態度・行狀そのものを統制する所の實踐理性に就て考察せられる。そして實踐理性の訓練に資すべき各種の敎科に立入る前に、吾々はプルータルコスから、一般に子弟が學校に於て敎師より敎を受ける時の態度に關する注意を聽くことが出來る。彼によれば聽覺は他の諸感覺に比して一層理性に關係が深く、德に到るの門戸である。敎說を聽いたことのない人は耕されぬ野であつて雜草の蔓延に委ねる外はない。語ることにもまして大切なことは聽くことの修養である。敎室に入つた子弟は講義最中に心を亂したり中坐したりすることなく、假令貧弱な講義でも終り迄心を靜めて聽かねばならぬ。疑問があれば、終つてから適度に質すがよい。講義の揚足を取ることは多くは虛榮や野心や嫉妬に因るものであつて、かゝる性情を以てしては理性に傾聽することは、不可能である。講義に對する滿足と不滿足との原因を深く考究して自らを警め育てよ。破壞的批評はいつでも建設的批

評よりも容易である。又聽講者の外面的態度擧止も講義の完了に對して大いに責任がある。端正な姿勢を取り講演者を注視し、自己の退屈さや先入見を洩らす樣な表情を愼み、隣席との私語を避けねばならぬ。

子弟は講義の當初の難解に辟易することなく、よく質しよく考へて、自ら進むことを努むべきである。敎へられたることを骨子基底として、その上に自ら細部を補ひ纏めつゝ、それを發展せしめ完成せしめねばならぬ。

かくの如きことが凡そ聽講者の心得である。要するによく聽きよく受けて而して自らこれを仕上げるのが學習の要諦であり、それが理性の訓練の先行條件である。理性はかゝる態度によつて多くの材料を收得し、それに働きかけることによつて善を實現して行く。故に「善く聽くことは善く生きることの初めである。」

上の如き一般的注意を前提として、プルータルコスは青少年子弟が文學を如何に學ぶべきかに就て論じてゐる。彼は自ら希臘の大詩人達の作品を普く而も熱烈に研究し、ホメロス、ヘシオドス、ツキディデス等の作品に關しては、內容的にも形式的にも精緻なる論評を行つてゐる。併し彼は結局は道德的見地からのみ文學を眺め、そこに生活への指針を求めんとしたものであつて、古の希臘人の誇るべき特徵たりし文學そのものゝ藝術的評價は今や彼に於ては、そして又彼の時代の人々に於ては、見ることが出來ないのである。かゝる倫理的見地の固執は、彼の名著『英雄傳』にも優勢に現はれ、それは史書であるよりも敎訓書であり、偉人達をばその屬する時代と社會との有機的全體關聯の一構成分子として扱ふ代りに、專ら彼等個々人の性格とそれへの道德的評價とを叙述してゐる。

かくしてプルータルコスに於ては文學も歷史も道德敎育の具としてのみ見られたのであつて、それ等が實踐理

性の訓練のための教科として玆に述べられたのもこれに因るのである。

實踐理性より理論理性への轉移　實踐理性の訓練のための教科から純乎たる理論理性の訓練の教科に移る途中に、プルータルコスは、自然科學と音樂と數學及び天文學を置いてゐる。彼は既にアリストテレースによつて示された歸納的研究法を繼承し、又大プリニウス（C. Plinius Secundus, 23—79）の『自然研究』（Historia Naturalis）によつて代表せられた當代の自然研究熱に恐らくは影響せられて、自ら該博なる自然科學的知識を修得した。尤も大プリニウスがウェスウィウス火山の爆發について研究中その犧牲となつて斃れた樣な、實地踏査的研究はプルータルコスの試みなかつた所であるが、それにも拘らず古來の學者の研究を博く參考し、科學者的批評眼を以てそれ等を集成した功績は大いに賞讃せられねばならぬ。先人の學說の比較對立に於て疑はしきものに際會し、去就を決し難き時には、輕卒にその何れかに加擔するよりも寧ろ「判斷中止」（epoche）を行ふべきことを勸めたことの如きは、勿論懐疑派の影響ではあるが、同時に科學者的操守として尊敬に値する態度であらう。教科課程に於ける自然科學の地位は、プルータルコスによれば、それが哲學（彼に於ては同時に神學）の基礎たる點に存する。宇宙・自然に關する知識なしには、神とか運命とか攝理とかの哲學的・神學的原理を理解することが出來ないからである。

音樂に關するプルータルコスの見解は、古代希臘人特にプラトーンの思想を承け、且つ當代の希臘羅馬の音樂の弊害に對する警告を含んでゐる。即ち彼は當代の音樂が宴會や劇場にのみ用ひられ、徒らに煽情的機能のみを發揮させられてゐるのを不當とし、古代希臘人がそれを神々の祭祀と少青年の教育とに用ひた場合の健全なる意

義を復活せしめんことを思念した。換言すれば彼に於ては、音樂は何よりも先づ道德的機能の故に尊重せられ、人々の情欲を統制して調和と節度とを齎らすために價値ありとせられ、又かゝる使命を果すべき歌曲のみが是認せられたのである。そして又音樂に於ける調和は同時に全宇宙の——例へば天體に見るが如き——調和であつて、こゝにも音樂より神の攝理に通ずる道があり、音樂が哲學・神學への前階として占める地位も肯かれるのである。但しプラトーンに於けるが如き人と人との調和、從つて國家の存立向上に對する音樂の使命は、プルータルコスの氣付かざりし點であり、そこに吾々は彼の思想の個人主義的基調の一表徵を見るのである。

音樂と密接に結合してゐるものは數學と天文學とである。プルータルコスはこの數學及び天文學に關しても、一面はピュタゴラス派の神祕的思想を繼承し、他面にはプラトーンに於けるこれ等の教育的意義を充分に重要視した。即ち彼にあつても亦、數學の示す數關係の法則と秩序と調和とは、そのまゝ音樂に於けるそれであり、又天體の運行に於けるそれであつて、それが人々の精神に節度を與へ、思索を修練し、同時に哲學への直接の基底となり前階となるのである。

理論理性の訓練　教科課程の最高に位するものは純粹に理論的・觀照的なる教科としての哲學であり、同時にそれは人を神に連ならしめる修練としての神學である。プルータルコスはこの點に關しても頗るプラトーン的であつて、假令プラトーンの如く人の生涯を「死の修練」とし死によつてのみ初めて完全に神と合一し得るとまでは說かなかつたにしても、理性が肉體やそれに根ざす情欲から解放されて、純粹に觀照的理性となることによつて

その史的地位　以上に吾々はプルータルコスの教育思想をば、從來の教育史家が取扱つた程度よりも一段の强い關心を以て論究した。想ふにそれは古代教育史の最後を充たすに適はしい試みであらう。彼こそは希臘の人でありながら、同時に羅馬大帝國の民であり、その廣汎なる教養と教說には希臘哲學の基調の上に羅馬的色彩が加味せられて居り、その教育說も從つて希臘的なるものゝ羅馬化を最もよく表現し、この點に於て彼は希臘羅馬の內面的融合を特色とする古代末期の教育思想を典型的に代表してゐるのである。彼は就中プラトーンを繼承する所が多かつたけれども、併し例へば、哲學を最高教科とするその教育論は、プラトーンの如く理想國家の支配者としての哲人よりも寧ろ自己一身の統制と安慰とを求める哲人を描いてゐる點に於て個人主義的色彩を帶び、又藝術的教養の地位と意義とを考へるに當つて、餘りに狹隘なる道德主義に陷つてゐる。そしてこれ等の特色こそ希臘末期の世界主義時代の思想界の大勢であり、且つそのまゝ羅馬末期の思想界の基調であつて、プルータルコスも亦この時代色を脫し得なかつたのである。

要するにプルータルコスは新しき時代に先驅する豫言者ではなくて、舊き時代を繼承し折衷し終結せしめる類型の人であつた。吾々は彼の浩瀚なる『英雄傳』と多方面なる『倫理書』に於て、希臘及び羅馬の偉大なる「人々と思想」とが集成せられてゐるのを見る。それは實にそこから振返つて古代を眺めるために極めて廣く便利な足場ではあるが、來るべき中世を照す光は全くそれとは別途の方向に求めねばならないのである。

結語　羅馬教育の全體的特質

羅馬の教育が希臘の教育と共に異教文化の基調に立ち、その限りに於て基督教の教育と根本的に對立してゐることは、既に希臘教育の全體的特質を述べるに當つて言及した。この共通の異教的地盤に立ちながらも、なほ羅馬教育を希臘教育から區別する全體的特質は、何よりも羅馬國民の大國民的風格であり、そしてこの風格を支へてゐる彼等の生活及び思想の特徵は實踐主義・常識主義である。チベリス河畔の小邑から歐羅巴・亞細亞・亞弗利加に跨る大帝國にまで發展した古今無比の政治的偉業は、曾て希臘民族の拔群の素質の中になほ缺如してゐた宏大なる包容性と統御力との成果であつて、この性格・實力こそは所謂大國民的風格に外ならない。

希臘民族（ヘレトス）が群小都市國家に執着して狹隘なる希臘（ヘラス）の地盤に覇權を爭ひ、平時にはそのロマンティックな眼光を高らかに馳せて閑暇を純眞なる知識愛や藝術的修飾に過してゐた間に、羅馬人は不斷に脚下を凝視して步一步現實の足場を世界的に擴大し、つひにその目的を達してやがて精神的教養を先進希臘民族に仰ぐに當つても、そこには甘美なロマンティシズムの色彩は甚だ稀薄であつた。希臘の豐富なる學藝を移し、特に未曾有の殷盛を示せる學校教育の課程中にそれを組織化した羅馬人が、それにも拘らず飽迄も實踐的要求を貫いて、克己自制の道德哲學や政界雄飛の辯論術に最大の關心を寄せ、他面また希臘民族に見られなかつた法律學集成の偉業を果したことの如きは、何れも羅馬國民の性格を表示するものであり、その場合に羅馬思想家の說いた所は、如何にも經驗世故に裏付けられた堅牢な常識である。教育思想として述べられた所も、曾てのソクラテス的銳利やプラトン的

328
597

深遠やアリストテレス的科學性を知る吾々に取つては、餘りにも凡庸にして日常的な、而も何等非難反駁の餘地なき健全至當の教說である。そこには例へば近代の大英國民に見るが如き常識の權威が冒し難き底力を感ぜしめる。

唯かゝる堅牢の思想が國民大衆に共有せられた期間にのみ羅馬勃興の歷史があり、それが少數の思想家によつて力說せられた時は既に羅馬國風は腐敗墮落の一路を辿つてゐた。こゝでも思想は最早朽ち倒れる大木に對して何等の支柱ともなり得なかつた。「一日にして成らざりし羅馬」が常に人生に於ける堅忍精進の必要を教へると共に、「羅馬の榮華」と「羅馬の衰亡」とはまた永く人の世の弱さと果なさとを象徵する。而もこの榮枯盛衰の感懷そのものが既に甚だ凡庸であり世俗的である。この凡俗を超えて、神の國の永遠の榮えに人の靈性を導くものは言ふ迄もなく希臘羅馬的なる古代教育と端的に對立する所の基督教的中世期の教育である。基督教の興起は古代に屬し、羅馬の歷史は基督教初期の發展を含むのであるが、その偉大なる實力と教育的成果とは中世期に見出されるが故に、吾々は基督教に關する論述のすべてを次篇の中世教育史に讓らうと思ふ。

西洋教育史叢說第
〔羅馬教育史〕 〔第貳回〕

著作者 石山脩平

昭和十一年
十一月十四日印刷
昭和十一年
十一月十八日發行

東京市神田區錦町一ノ三五
發行者 朝倉邦造

東京市神田區錦町三ノ二六
印刷者 小笠原秀雄

發行所 東京市神田區錦町一ノ
電話神田・四五〇四・四四〇
九八七一・三番
賀文館